

* 転 *

朱乃は思う。

自分が生まれた日に岩手県で起こったある殺人未遂事件。

あの少年たちは、何を思って、自分たちの祖父母を殺そうとしたのか？

報道機関はしばしば、

——最近の若者は現実と空想の区別が付いていない

と、語った。大人たちもその意見に追従した。朱乃の家族ですらそうだった。

だが、本当にそうだろうか？

本当に現実と空想の区別が付いていないから、人殺しに手を染めようとしたのだろうか？

——逆ではないのか？

朱乃はそう思うことがある。

——現実と空想の区別が付いていなかったからこそ、人殺しに手を染めてしまったのではないのか？ 現実を直視し、自分の現状と将来を正確に予測した結果、凶行に走らざるを得ないのではないか？

大体、あの手の連中がまともに生きていたとして、何になる？

彼らは朱乃と同じだ。百万人に買ってもらえる歌が歌えるとか、^{テニス}庭球で世界順列一桁に入っているとか、凄い発明とか発見とかをして、ノーベル賞でも貰っているとか——そんな人間ではない。そんなことを成す力はない。そんな輝かしい世界とは無縁な存在である。才能とか、そういう次元の問題ですらない。そもそも、努力が足りない。先に述べたような者たちには、それこそ、皆、幼い頃からの積み重ねがあるものだ。しかし、朱乃たちはそこからして、既に欠けている。

だから、無理なのだ。もう、手遅れなのだ。間に合わないし、ひよっとしたら、産まれた時から、そもそも、無縁だったのかもしれない。

残された可能性といえば、毎日毎日つまらない学校に通うだけ。その次はあちこちに頭を下げまくっての就職活動。それが終わったら、今度は学校の代わりに毎日毎日会社に通り続け——文字通り、死ぬまで働き続けて、そして、死んでいく。

しかも、それは最良の場合にすぎない。

——でも……。

そこで、でもと思ってしまうのが朱乃という少女なのである。

——いわゆる一つの《孤独な群集》^{The Lonely Crowd}？ いや、ちょっと違うか？

……いずれにせよ、今の朱乃やあの少年たちの年頃——十代の半ばというのは、そういうことに気付かされる年頃なのだろう。

サッカー選手になりたいといえば、『おや、どこの団体から、お声がかかった？』
小説家になりたいといえば、『で、今、どこの新人賞の何次選考？』

そんな風に目標に対して、具体的な達成過程を要求され、自身もまた意識をせざるえない年頃。夢を追い続けた結果、三十過ぎで無職——自室に籠って、電腦遊戯を延々続け、親に『せめて、バイトくらいしたらどうだ？』と聞かれると『俺は、個性を活かしてクリエイティブな事をやりたいんだよ』と返すような——そんな風になった者たちの姿が目につく年頃。あるいは登校中に見かける浮浪者の生き方が、現実に入りうる自分たちの未来図かもしれないという不安に駆られる年頃。

それと同時に、その不安を蹴散らして進むための『確固たる力』を育む年頃でもある。

ただし、その『確固たる力』を育むのは難しい。口で言うほど容易いことではない。

となると、待っている将来は……。

——ならば、そんな現実を直視してどうなる？ それなら……、

「キているよな、私も。犯罪者の中でも特にお馬鹿な連中に肩入れするなんて」

不謹慎である。被害者の方々や改心したかもしれない加害者の方々にとって心地よい話ではあるまい。

そもそも、朱乃はあの少年たちとは違う。不登校ではないし、まかりなりにも、有名私立校に毎日真面目に通っている身である。暖衣飽食の弊害だという自覚もある。

ただ、願望と現実の齟齬においては似たようなものだ。そして、それは朱乃に限った話でもない。相当に酷い親にでも育てられた——そして、それはこの学園に通う者には、ほぼありえない——場合を除き子供は己の未来や将来に多大な夢を抱くものだ。しかし、よほど有能な人間でもない限り、それは過大な夢でしかない。自分では過大ではないと思っている夢——例えば、朱乃の級友の一人が抱いている『専業主婦でもいいから、子供と愛情に恵まれた家庭を築ければそれでいい』という類の夢であっても、冷静に検討すれば、それがいかに難しいかは言うまでもない（この場合、『専業主婦』という賃金労働をせざるに暮らしていける特権階級に成れることが前提になっているのだ）。

夢を叶えるのは力であって、想いではない。

そして、力ある強者にとっての夢は遠大かもしれないが、素朴な努力目標に過ぎない。

だが、力なき弱者にとって、夢への希望は神への信仰とは似たようなものだ。

畢竟、幻に過ぎない。しかし、それに浸っている間は幸せでいられる。

あの少年たちにとっての夢——自分たちは秘密組織の一員であるという多少不健全ではあるものの、つまらない現実よりははるかに甘美であったろう世界——は、確かに幻であった。だ

が、それに縋っている間は、彼らもそれなりに、他者とも折り合いをつけていたのである。ただし、その夢を現実のものにしようとするまでは。

結局、痛みと向き合う覚悟とか、悲しみを受け入れる器量とかは、それが出来るだけの力の持ち主にのみ許された特権でしかないのだ。

でも、呉羽は違いかもしれない。

そう、彼女は違いかもしれない。



呉羽が聞いたのはハートマークが付きそうな明るい声だった。

「ねーねー。あの子に変なことされてないよねー？」

……これは絶対違う。明晰だが陰鬱な朱乃の声とは正反対である。

「えーと……どちらさまでしょう？」

「あれー、『あの子』からか聞いていないの？」

「いえ、朱乃からは特に何も……」

「あ、違う違う。あたしの言っている『あの子』っていうのはあなたの同居人のことよ」

みしりと、何かが軋む音が呉羽の裡うちに響いた。

「そうかー、そうだよねー。今あの子、髭もじゃだもんねー。いやあ、第二次性徴って、残酷だわ。予想通り、いい男には成ってたけどさ」

戦慄が走った。呉羽の中で『髭もじゃ』と言えば、それはヤヒヤーのことだ。しかし、どうしてヤヒヤーの知り合いが朱乃の携帯端末を持っている？

「あと、あの子に伝言。『もうちょつと、慎重になりなさい』ってねー」

「……あんた、この発信元……!!」

「あ、大丈夫大丈夫。携帯借りているだけだから。ちゃんと生きているよ。五体満足だし……そうそう、貞操も無事だよ」そして、電話の主はクツクツと笑って付け加えた。「今は、まだね」そして、一方的に切られる通信。

それからどれくらい経ったかはわからないが、ヤヒヤーが部屋の扉を勢いよく開けた。慌てているのだろう。英語ではなく、アラビア語で彼は叫んだ。

「呉羽！ 二宮朱乃を確保する！」

「……遅いよ……!!」

呉羽ははき捨てた。

「あ、七美。そうよ。悪い？」とにかく、手短に話すわ。送信した圧縮ファイルには気づいた？もし、今から、二十四時間以内にあたしからの連絡がなかったら、解凍し、その中の指示に従うこと。わかっていると思うけれど、以後そのファイルはネットワークから、独立した端末に移して、痕跡も可能な限り消してね。あなた自身の安全のためにも。解凍暗号はあなたがあたしに旅立ちを囁いた日のモノを。以上」

当然ながら激しく抗議する友人を無視して、呉羽は携帯端末を閉じた。

「これで保険はかけた」

では次に——と、呉羽はヤヒヤーに目を移した。

今日一日で彼への評価は暴落している。また、ヤヒヤー自身の憔悴も目に見えるものだった。

「さて、事情を説明してもらおうかしら？」

どうしても詰問する口調になってしまふ。ヤヒヤーの方もそれに逆らわない。

「……新人教育と戦術指導を外部委託した現地の私兵ミリシヤの訓練に彼女が巻き込まれた」

「私兵？」

「そうだ。準軍事的組織バラミミリタリという点においては、俺たちと同じだな」

「準軍事的組織——って、日本にそんなのあった？ 在日米軍のことじゃないよね？」

「『アンノーグミ』という組織だ。日本では結構著名と聞いていたが、知らないか？」

「『アンノーグミ』？ 呉羽は一瞬戸惑ったが、やがてそれが『安能組』と書くのだと思いついた。「ああ……そういう人たちね。了解」

——そして、今のあたしはそういう人たちと大差はないのか。

そう考えると、呉羽は墮ちる所まで墮ちたという気がしないでもない。

「で、どうして、朱乃が巻き込まれるの？」

ヤクザというものは金にならないことはしない。それがどうして平凡な女子高生を拉致せねばならない？

たしかに朱乃の家はそこその金持ちだが、あくまでもそこそこである。身代金が目的なら、もっと適切な相手がいるはずだ。少なくとも、必要経費に足る身代金を用意できる金持ちか否かは怪しい。昔ながらに地上げ等が目的なのだとしても、いきなり拉致というのは大袈裟すぎる。普通はもっと矮小だが陰湿で、安全な手段から始めるものだ。そして、朱乃の周囲にはそういう気配はなかった。

そもそも、身代金が目的にせよ、地上げが目的にせよ、どうして、朱乃の家族ではなく、呉羽の方に脅迫（？）の電話が入るのだ。しかも、相手の言葉を考えると、呉羽やヤヒヤーのことをよく知っているようだった。いや、むしろ、朱乃よりも、呉羽に、呉羽よりもヤヒヤーに執着がある口ぶりだった。

「俺のせいだ」

「それはわかっている」

呉羽の方に心当たりがない以上、そういうことになるのだろう。

「原因は怨恨？」

「……そうだな。そういうことになる」と、ヤヒヤーは自分に言い聞かせるように語った。「ただ、お前が考えている状況とは少し違う。怨恨を抱いているのはあの女ではない」

「……どうということ？」

「俺があの女に怨恨を抱いている。だから、俺は彼女を追いかけた。そして、この国で彼女の足跡を見つけた」

「ちょっと待て！ あんたの『家族の仇』ってっ？」

「そうだ。あの女のことだ。しかし、実際には俺が泳がされているに過ぎなかった。とつくに俺の足跡に気づいていたらしい。そして、こちらが仕掛ける前にあの女は攻勢に出た」

「その結果がこれ？ そこまで、状況が進んでいたのなら、どうして、あたしを学校になんてやったの？ こういう事態は想定できたはずでしょう！」

ヤヒヤーが家族の仇を捜して、傭兵になり、呉羽と出会い、そして、この国に来たことは説明を受けていた。しかし、ヤヒヤーが目標との距離をそこまで縮めているという説明は受けていない。いや、むしろ、雲を掴むような話だと本人が語っていた。だからこそ、呉羽も普通に学校へ通う気になった。そこまで、ヤヒヤーが現実的に『脅威』へちよっかいをかけていると知っていたら、呉羽も学校へ行きたいなどは絶対に口にしなかった。それこそ、『こういう事態は想定できた』からだ。ましてや、呉羽の何十倍も堅実で慎重なヤヒヤーには、より容易く『こういう事態は想定できた』はずだ。そして、呉羽の何百倍も誠実で善良なヤヒヤーが『こういう事態は想定できた』のなら、それを避けるべく動くのが当然ではないか。

無垢とはいえずとも、穏やかな日々を送っている女の子を危険にさらすまねをヤヒヤーが行うわけがないではない。

呉羽はそう思っていた。すると、ヤヒヤーは信じられない言葉を吐いた。

「……こういう事態が狙いだっただけだからだ」

次の瞬間、呉羽の拳がヤヒヤーの髭面にめり込んだ。

瞋恚のままに動いた呉羽であったが、身体に染み付いた拳撃は識意下で最適化されている。体格差をもものともせず、男の身体は壁に叩き付けられた。

「今すぐ全部吐け。この距離なら感染領域だ。あたしはあんたをなぶり殺しにできる……!!」

叩き付けられたヤヒヤーは一切の抵抗をしなかった。「……お前を学校にやったのは一つに前前の将来を考えてのことだった」

「あたしも高校くらいは出ていたほうがいいという親心」

「そうだ。信じてくれるか？ こういう事態が狙いだっただけは事実だが、その見込みはさほど高くなかった。何しろ、この十年、あの女の足跡はまるで見えてこなかったからな。あくまで、

この事態は『起こるかもしれないがそれも狙いのうち』という程度のもだった」

「お人よしのあなたのことだからね。どうせ、あたしの将来の方がむしろ本音だったのでしよう。高校を出て、大学に行つて、就職して……そうすれば、あたしはまだ戻れる」

「そう思ってくれると嬉しい。だが、理由はもう一つあった。感傷だ。俺にとつての感傷が原因であり、あの女にとつての感傷が目的だった」

「よくわかんないけど……あたしを騙したのね」

「お前を煩わせるまでもない……いや、甘えだな」

ヤヒヤーは呉羽に初めて懺悔する。

「お前なら、わかってくれると思ひ込んでいた」

その一言に呉羽は後ろめたくなった。

「……そんなこと言わないでよ。友達が酷い目に遭っているのに、あたしは……」

——嬉しくなってしまう。

……かつての自分は嫌がるヤヒヤーに無理やり付いていった馬鹿娘でしかなかった。ヤヒヤーの本音としては、常に呉羽を日本へ返してやりたかつたのだろう。しかし、それを強制することがお人よしのヤヒヤーにはできなかった。かといって、目を離したら、素人の呉羽が野垂れ死にする。だから、渋々、彼は呉羽が付いてくるのを黙認した。

そして、呉羽はそういうヤヒヤーの性質に気付かなかつた頭の悪い小娘であり——あるいは気付いていながら、そこに付け込み甘えるだけの子供だった。

たしかに今の自分は只の足手まといではないという自負はある。しかし、ヤヒヤーなしでは何もできない突撃馬鹿であることに変わりはない。実際、近接格闘や近接戦闘を除けば、すべての技能がヤヒヤーの足元にも及ばない半人前だ。

——でも、そんなあたしにこいつは甘えてくれたんだ。

ようやく、大人の関係になれた。

そこに喜びを見出した呉羽は、多分、朱乃を裏切っていたのだろう。

朱乃が目覚めると、そこは深夜の塾宿学園だった。多分、放送室の一つだろう。

深夜とはいえ、見慣れた場所にいたことに朱乃は息をつき……かけて、思いとどまった。

腕には手錠がかかっており、それが機材に結ばれていて、身動きが取れない。

朱乃は拘束されているのだ。

しかも、周りは男に囲まれている。

一人、二人、三人、四人、五人——五人もいる。

それだけで、背筋が青くなる。何しろ、自分は男性恐怖症なのだ。

おまけにあまり柄がよさそうではない。はっきり言えば、朱乃にはまるで縁がない連中だった。

一応、歳は若い。朱乃と同じ年かおそらく十歳程度上というところだろう。耳飾や染髪の類もなく、衣類も動き易そうなものが基本で、それほど奇矯なわけではない。

だが、朱乃は性別以前の段階で彼らに拒絶反応を起こしていた。

——あの御さ青と逆なんだ。

彼女は蓮っ葉だが、品があった。気安い女性を装っているものの、それは世渡りで身に着けたものであり、元々は『イトコのお嬢様』だったと思わせる節がしばしば垣間見えた。

しかし、この連中はその逆だ。

例えば、歯並びがよくない。あるいは髪の毛にも何度も染めた後らしき痛みがある。この塾窟学園の縁者には滅多に見られない特徴だ。

「あ、お目覚めだぜ」

気付かれた——そして、男が浮かべた下卑た笑みに、朱乃は背筋を凍らせる。

だが、別の男がすぐさま横槍を入れる。冷たい声だった。

「『アーチン』に連絡する」

「あ、ああ、そうだったな」

意外にも、下卑た笑みの男は素直に従った。

この流れで、朱乃には確信じみたものが芽生えた。

——連中は規律正しい行動を取ってはいるが、まだ、染み付いてはいない。

男の一人が連絡のため携帯端末を取り出す。だが、その直後に扉が開いた。

あの『南山御さ青』が現れたのだ。

彼女は平然としていた。態度が変わったのはむしろ男達の方だ。『冷たい声の男』が即座に姿勢を正し、直立不動の形になる。それを目にした他の連中は、慌ててそれに倣う。

御さ青が煩わしそうに腕を振ると、今度は男達が一斉に脚を広げ、腕を後ろに回す。

——『直立』から『休め』At Easeに変わって事？ それってつまり……。

その経緯に朱乃は恐怖よりも混乱を覚えた。あまりにも現実感がなさ過ぎる。朱乃の推測が正しければ、この世界は漫画の中と大差がないのだ。

「どーしたの？ 顔青いよ」

「……私は男性恐怖症なので……」

朱乃の本音に、御さ青は何やら安堵したらしい。

「よかったー。冗談が言えるくらいの余裕はあるんだね」

「……………」

「あー、でも、オンナノコ分の不足は深刻そうだねー。よし、あたしから補充してよー」
そして、御さ青はその場でくるりと一回りした。

もう一度着替えていたらしく——例によって、やたらと露出度が高い——下はショートパンツにロングブーツ、上はチューブトップ状のハーフトップ一丁というシロモノだった。

パンツもトップも、ぴったりと張り付くようなお揃いのエナメル素材である。脇と腰の辺りが左右に開いて、そこを編み込まれた紐で結んである。

——……ショーツとか横から見えないのかな？

朱乃が勘繰っていると、彼女はいやらしい笑みを浮かべた。

そして、両手を臍の上辺りで組む——二つの膨らみが強調される——姿勢を取り、朱乃の頬に触れるか触れないかという辺りまで、歩み寄った。

朱乃の鼻腔をくすぐる魅惑の香りに包まれる。

——……やっぱり、ノーブラ？

それは柔らかく、しかも張りがあつた。Eというのは嘘ではなかったらしい。半日前の朱乃ならば、感乱していただろう。

だが、今の朱乃の興奮は冷たい方向へと向かつた。

「……アーチン——《阿青》アノコノナというのがあなたの本名ですか？」

「おー、よくこの連中の四声を聞き分けられたね」

「……あなたがこの人たちの統率者？」

「いいえ、教育者よ。言ったでしょ。あたしは指導員インストラクターだつて」

「……戦闘指導員？」

「実質、新人教育も兼ねさせられている気もするけどねー」

御さ青——は平然と答えていた。朱乃としては『漫画の読みすぎだよ』と笑い飛ばして欲しかったのに……。

「今、そういうのつて、みんな外部委託アウトソーシングでさー。面倒事は全部あたしみたいな下請けに回ってくるのよ」

そう言つて、《阿青》は朱乃に身体を絡め出し、その四肢を撫で廻し始める。どこまでも優しく温かく、執拗な愛撫に朱乃は震えてしまう。環境のわりに朱乃は、この手の『じゃれあい』への耐性が乏しい。必死に身体を強張らせていると、《阿青》は残念そうに尋ねてくる。

「……オンナノコ分は補充した？」

「ええ」

朱乃がそつけなく答えると、《阿青》はあっさり身体を離れた。

そして、その極上の黒髪を棚引かせて、男達の方を向く。

「さて、その坊や達……この娘は丁重に扱うように言っていたよね」

「お……自分達は何もしていません」

「でも、さっきまで脅えていなかった？」

五人の男はそれこそ恐怖に震え、黙り込んだ。

それは奇妙な光景だった。

あまりに陳腐なので、今までこの表現を避けてきたが、どう言い繕っても《阿青》は極上の美女である。しかも、彼女はとんでもない露出度に戻っている。こんな状態でなければ朱乃とて身悶えていたに違いない

朱乃は男性の生理などろくに知らない。だが、若い男が美女——それもこの手の肉感的な美女——を前にすれば、餓えた狼のようになるのが自然ではなかるうか？ いや、これは朱乃の偏見かもしれないが、それでも、『目のやり場に困る』とか、そういう気配があってもいい気がする。

しかしそれはまるで——飼い主の暴力に怯える子犬の群れだった。

だが、子犬の群れから『冷たい声の男』が一人決然と前に進み出る。

「それは自分の責任です。注意が足りませんでした」

「おおー」

パチパチと《阿青》が拍手をする。どうやら、『冷たい声の男』の行動に感じ入ったらしい。

次の瞬間、その『冷たい声の男』が吹き飛んだ。

信じ難いことに、彼は壁に叩きつけられていた。小さな放送室とはいえ、部屋のほぼ中央に立っていたはずの彼は、壁に寄りかかり、鼻血——おそらく、鼻の骨は折れている——を抑えながら、「申し訳ありません」と呟いていた。

「うっわー。きつたないー」

そう言って、《阿青》はウェットティッシュで自分の手を拭き出した。白魚のような傷のない細い指を拭ったティッシュは赤く染まっていた。

この《阿青》が彼を殴り飛ばし、壁に叩き付けた——朱乃は混乱しながらも理解した。女の細腕で、どうして大の男がそのようになるのかはわからない。だが、そうでなくては、眼前の現実の説明できない。

残る四人の男は、一瞬だけ『冷たい声の男』に申し訳なさそうな視線を向け……すぐに目を逸らした。

——いくじなし。

おそらく何もわかっていないからだろう。朱乃はそう思ってしまった。

「山田月クン、佐藤千聖人クン、鈴木紅蘭麻クン、川中夏翔瑠クン、渡辺龍騎クン。君たちにはいくらかかっている？」

唐突に《阿青》が質問する。

対する五人は皆無言だった。だが、殴り飛ばされた『冷たい声の男』が唇を噛んだのを朱乃は見逃さなかった。

「わからない？」

くるりと《阿青》は朱乃に向き直った。

「朱乃ちゃん。君にはいくらかかっている？」

「……多分、両親は私をここまで育てるのに五千万円はかけている」

「即答だよ、さっすがー」

いくら《阿青》に褒め称えられても、朱乃は嬉しくともなにもなかった。

「わかる？　これが五千万円を投資された女の子ってヤツよ——だから、弁えなさい」

彼女は朱乃が知らない下品な言葉を使った。

「股を開かなきゃ見向きもされない能なしブスのヤリマンから生まれた連中とは、生まれた時から差がついているのよ」

「このまま警察機構に駆け込むというのも一つの手だぞ」

「この国の警察はああいう相手を想定していない。無駄な犠牲が出るだけよ」

「直接公安に行けば、まともな対応をするさ。アメリカ経由で俺の名前を出せば、ある程度は幅を利かせられるしな。第一、あの女はこの国にとっても極めて有害な犯罪者だ。最低限の犠牲でこの一件を処理してくれるだろう」

「その犠牲の中には朱乃が含まれていないっていう保障は？」

「それは俺たちが行っても同じことだ」

ヤヒヤーの言葉は毎度の如く正論だった。呉羽もヤヒヤーも一介の傭兵に過ぎない。それでもヤヒヤーは歴戦の勇者といつていい。が、呉羽は半人前である。勿論、ヤヒヤーは相手を知悉しているし、自分たちは警察機構と違い、違法行為も平気で行うことができる。ついでに倫理からの逸脱も、だ。ヤヒヤーの方は知らないが、既に呉羽は非戦闘員への無条件発砲をも決意している。しかし、それらを考慮しても、サント Special Assault Team S A T（特殊急襲部隊）のようなバケモノじみた連中が出張ってくれるなら、彼らの方が適任なのかもしれない。

——そうだ。そっちの方が……。

そんな己の甘い考えと彼の正しい言葉を抑えこむため、呉羽は声を荒げた。

「友達が危ないんだよ！　どうして、動かなくてもいい理由ばかり並べるのっ？」

「必要だからだ。それとも、こう言い換えようか？」

そして、ヤヒヤーは同じ台詞を繰り返した。

「……ならば、何故、舘山呉羽の名で入学手続きをした？」

「それは……」

「言っておくが、俺の今後の予定は変わらないぞ。二宮朱乃には本当に悪いと思っているが、俺はこの日のために半生を捨ててきた。これ以上、あの女の犠牲者を増やさないためにも、俺もここで、この手で、あの女を確実に殺さなくてはならない」

それが最低成功条件であり、目標達成条件だ——とヤヒヤーは語った。

彼は不思議とこの手の宇宙開発用語を用いる（おかげで呉羽も影響を受けてしまった）。昔、その癖を指摘すると彼は顔を赤らめて、『子供の頃好きだったんだよ』と白状した。

昆虫が好きで、恐竜が好きで、宇宙が好きで——つまるところ、ヤヒヤーはそういう『少年』だったのだろう。

だが、その『少年』はたった一人の女を殺すため、賤業に身を窶やぶしていた。

「残念ながら、俺一人ではあの女に太刀打ちできない。故に誰かの手を借りる必要がある。しかし、それがお前である必要はない。そして、お前は二宮朱乃が無事に帰ってこればいい。だが、そのためにお前が命をかけ、手を汚す必要はない」

「……わかってるよ」

「本当にわかっているんだな？ 俺はあの女をこの手で殺せば十分だ。その後、国外追放だろうが、刑務所だろうが、あるいは最悪の結果であっても、甘んじて受け入れよう。この『ヤヒヤー・イブン』ザカリーヤ』はそういう存在だ。だが、お前は違うはずだ。故に今のお前は『館山呉羽』ではないのか？ お前も今まで色々やってきたが、この国ではシロだ。お前自身も言ったように、今なら、まだ戻れる。しかし……」

「あたしは朱乃を助ける。あんたはあの女を殺す——それで十分でしょ？」

切り捨てるような呉羽の物言いに、ヤヒヤーも黙り込んだ。

そして、ため息を一つ。

結局、ヤヒヤーは鍵を——銃火器の入った鞆の鍵を——呉羽に投げ渡した。

——なんだか、父親に小遣いをせびる娘の気分。

とはいえ、実情も大差ない。何しろ、この手の物資の流通管理はヤヒヤーにしかできない。だから、訓練以外で触らせてもらえないのも久々だ。背徳的な興奮に身を委ねて、鞆を開ける。

「BENELLIの……M4？」呉羽が入っていた散弾銃の機種をすぐさま確認し、そして、文句をつけた。「M3S90は手に入らなかったの？」

「無茶を言うな。正直M4でも足が付くかもしれない。いくら、天下の米軍制式採用で相対的流通量が多いとはいえ、今時、散弾銃ショットガンだからな。自動小銃を備品からちよるまかす方がまだ目立たんよ」

かつての『傑作』とはいえ、今ではM4よりもはるかに少数派であるM3S90を用意するのは、このM4を入手するよりもさらに困難である——と、言いたいらしい。

「でもさ、やつぱり、手動排莢ポンプアクションで『じゃこん』ってできないのは……」

「いい加減に手動排莢ポンプアクションにこだわるのはやめろ。その回転式拳銃リボルバーもそうだが、日頃から丁寧に掃除していれば、作動不良なんぞ……」

「自分の愛用品は流通量が多いからって、あたしみたいな少数派の立場を軽んじるのはよくないよ」

「妙な癖は、矯正しろと言っているんだ！ 常に補給が万全とは限らん！」

ピシヤリと怒鳴られ、思わず呉羽は体を縮めた。いつもの事ながら、ヤヒヤーの言葉は正論である。そもそも、この国で本格的な銃火器を調達してもらっただけでも、ありがたい話だ。厄介なことに日本の銃規制はかなりの水準で達成されている。

——…いや、そうでなければ、困るか……。

本当は手に入らない方がいいのだ。逆に言えば、こんなものを手に出来るという点で、既に『呉羽の故郷』から少しはみ出ている。

銃身に触れると、己の内の転轍機が働く。生き残る為に必要な恐怖心が消え、殺し合う為に不要な現実感が消える。

そして、呉羽の《マインドセット心がけ》が整う。

「……ま、M4は銃身がオンナノココンナノコしてて、あたし向きかな……じゃ、行ってきまーす」

「は？」

「室内に入ってしまったえば、トレンチガン塹壕銃の狩場。それは狙撃屋出身のヤヒヤーも納得してくれるでしょ？」

そう言って、呉羽は車両の扉を開けて、セーラー服のまま、飛び出していった。

埜窟学園の校門前。

登下校時には少女達で満ちるこの空間も今は無人に近い。周囲の気配を探っても、半径五十メートルには二人しかいない。

一人は学園の制服に身を包んだ少女——すなわち館山呉羽。

もう一人は黒い上下を着込んだ若い男——本名不明。

明らかに異常だった。この学園の生徒である呉羽が校門に現れるのは不自然ではない。夜中とはいえ、忘れ物を捜しに来たとか、いくらでも考えられる。だが、校門前を監視するように突っ立っている男はやはり不自然だ。警備員でもない男がこの名門女子校前に居座っていれば、それこそ警備員に詰問されてしかるべきだ。ところが、その警備員は影も形もない。

第一郊外といえ、日本の県庁所在地で『人影のない道路』などそうはない。偶然にしては出来すぎている。

——やっぱり、朱乃はこの中ね。

呉羽は目を細めた。ヤヒヤーの情報を信頼していたものの、あまりにもあまりな監禁場所である。一抹の疑念を抱かずにいられなかった。だが、もう迷うことはない。

第一、あの男の正体は髪を解かずともわかってしまう。

その上着の左脇が、何かを隠している重みで、不自然に下がっている——思わずクックツと嗤ってしまった。

さすがに男も怪訝な視線を呉羽に向ける。だから、呉羽はニッコリと微笑んでやった。

すると男は露骨に戸惑い、顔を赤らめた。間合いをじりじりと詰められていることにも気付かない。

自分でも男を惑乱できるのとは、やはり、セーラー服は偉大だ——と呉羽は感動した。その感動のままに、呉羽はその身を翻す。

刹那の後、男の首はずり落ちた。

隠し持っていた炭素結晶繊維の糸で呉羽が首を絞め切ったのだ。

当然、男は死んだ。

予め距離を置いておいたので、返り血は浴びなかった。特にこの制服は汚すと後が面倒だ。一方、男の屍はどぼどぼ血を流している。さて、これを朱乃が見たらどう思うだろう？

「……それにしても、意外とこんな手が通用するものだなー」

相手の練度は決して高くない。使った道具こそ、ヤヒヤー経由で手に入れた最新技術の高級品であるが、手法としては絞殺の一種に過ぎない。経験を積んだ相手ならば、いくらでも対応出来たろう。どうやら、『敵』の手駒は新兵同然らしい。人数にもよるけれど、これならいけるかもしれない。

それは呉羽が楽観的な未来を描いた瞬間だった。

ピ。ピ。ピ。——と電子音が響く。

男が服の中に持っていた携帯端末が鳴っていた。成りすまして、やり過ぎすのは無理だ。

「……ごめん。ヤヒヤー、援護して。あたし突貫する」

その『仔馬の尻尾』^{ポニーテール}を揺らして、呉羽は校門をひとつとびで乗り越えた。

突貫する——という一言にヤヒヤーは思わず叫んだ。

「おい、待てっ、狙撃手が潜んでいたら？」

『あたしのヤヒヤーなら逆狙撃してくれる』そして、通信が途絶える。

「……おい、勝手なこと言うなっ……くそっ」

毒づきつつも、ヤヒヤーはすぐに狙撃手を探し出す。その場から、動かなかったのは、この事態も想定し、予め適切な地点に移動済みだったからである。しかし、よくよく考えれば、こ

ういったヤヒヤーの繊細な気配りが、呉羽の無茶を助長しているのかもしれない。

——ちつ、帰ったら、説教だな

それでも、手を抜けないところが、ヤヒヤーの悲しい性である。

そして、体勢を整え、照準器越しに世界を覗く。

ヤヒヤーは日常生活においては保守的で封建的だが、戦闘行為においてはそこそ合理的で近代的である。

狙撃手としても『今時』の男だった。

故に一撃必殺には拘泥せず、連射の効かない遊底手動装填は忌避する。むしろ、仕事柄狙撃だけをやっているわけにはいかないので、自動小銃アサルトライフルでないと困る。そもそも、専用の狙撃銃でなくとも、それなりの小銃ライフルなら無風三百メートルまで必中の自信があった（そして、道具に頼るのではなく、道具を活かしてこそその職人である——と考える程には昔気質である）。何より、それだけの接敵技能をヤヒヤーは持っているのだ。

銃器は誤作動が少ない事が第一だ。あるいは流通量が多く、入手が容易で、補給が確実なことが重要である。その次に命中精度の保障だ。これらの条件を一定以上満たしていれば、それ以上のえり好みはしない。

ただし、今回はMSG・90というヤヒヤーにしてはやや珍しい自動小銃を使う羽目になっている。

日頃使っている5・56mmよりもずっと重い7・62mmの弾丸。運搬や補給の問題でやはり使えなかった12・7mmには及ばないものの、いつもよりはずっと弾道は安定するはずなのに……。

ドクンッ！

その瞬間、心臓が高鳴った。激しい鼓動が全身を駆け巡る。

——何故だ？

いつもなら、訓練でも実戦でも、ここまで、心臓の鼓動は激しくならない。

だから、これはおかしい。

狙撃手出身であるヤヒヤーは、日頃は照準器を覗くだけで、身体が勝手に最良の状態に調整されていくというのに……。

——不安なのか……俺は？

なるほど、不安がヤヒヤーの心身をかき乱し、脈拍を上げていた。それはありえる。では、その不安とは？

——……観測員が……呉羽が側にいないことか……？

元々、ヤヒヤーは一匹狼的な狙撃屋である。古臭い奴としばしば呉羽にからかわれる。ただ、

呉羽と共に組むようになってからはそんな彼女を洩々観測員として扱っていた。

観測員とは、近代の狙撃手と対を成す存在だ。その名の通り、観測作業の面で狙撃手を補助する。具体的には双眼鏡や測距器などによる距離測定や全地球測位システムなどによる現在位置特定、目標の映像撮影やその記録、通信作業などを行って狙撃手を支援するのが主務である。が、こういった狙撃手の助手的な役割の他に、観測員にはもう一つ任務があった（というか、お世辞にも呉羽の観測技術は高度なものとは言えず、助手としての役割に限ればヤヒヤーは往々にして、彼女の助けを拒んでいた）。

それは狙撃手——つまりはヤヒヤーの——護衛だ。狙撃手は狙撃体勢に入れば、目標に完全に集中する。逆に言えば、目標以外には無防備になるのだ。それでなくとも、狙撃手の装備は近接戦闘には甚だ不向きである。ヤヒヤーのように万能にして完璧に近い技能を誇る兵士であっても、やはり、限界がある。それを突撃小銃^{アサルトライフル}などで（呉羽の場合は散弾銃^{ショットガン}で）武装した観測員が補い、狙撃手を守る。それが観測員のもう一つの役割だ。

しかし、かつてのヤヒヤーはその観測員を不要と断じていた。利点は認めるものの、単独行動の身軽さを殺してまで、欲しようとは思わなかったのだ。純粹な観測作業についてはヤヒヤー一人でこなせるし、護衛という点でも、狙撃の位置と時機に気を使えば、必要ないと考えていた。どの道、狙撃手など、接近を許してしまった時点で、アツラーの身元に召されるしかないものだと割り切っていた。

いや、極論すれば、裏切り者の観測員に殺される。その可能性をヤヒヤーに想定させ、むしろ、精神を乱す邪魔者になりかねない。そんな風に思っていたところがある。

初めて呉羽に観測員を任せた時そんな考えに変わりはなかった。ただ、新兵であった呉羽を自分の傍という安全地帯に置いておき、いざという時は狙撃手である自分が観測員である呉羽を護衛してやらねば——というあべこべな打算が働いていただけだ。また、無防備になる自分の姿を見せられる程、呉羽を信用していたわけでもない。単に呉羽の技量では、自分を殺すことなどできないと判断していただけだ。そして、そのいずれの場合であっても、事が済んだ後に『これでわかっただろう。ほら、さっさと日本に帰れ』と吐き捨てるつもりだった。結局、ヤヒヤーにとつて、呉羽はそんな存在であった。

まだ、呉羽が年齢においても内実においても、ここに通う少女達と大差がなかったあの頃か
ら。

あの傭兵募集所にやってきた世間知らずのお嬢ちゃんにヤヒヤーが出会ったあの頃から。

少女に無謀さを正しく認識させることこそが大人の義務だと考え、必死に日本に帰るように説き伏せていたあの頃から。

もう、何年経ったことだろうか？

——『あたしのヤヒヤー』か……。まったく、嫁入り前の娘の言葉とは思えん。後で、説教
だな……。

信頼に応えたい。相棒を守りたい。

そんなヤヒヤーの意思は、今、確かな力となって、世界に具現されようとしていた。

「了解した。予定通り、通信を封鎖する」

「これは——電波妨害？」

携帯端末の異常に気付いた男はようやくその結論に達したらしい。

「はい、正解」教師の口調で《阿青》は答えた。「ヤヒヤーならそのくらいの装備は用意できるし、数的優位がこちらにある以上、連携を絶つのは妥当な手段ね。特に手駒に呉羽ちゃんがいるなら、自分達の連携が不利になる見込みは薄い」

朱乃は驚いた。

——呉羽が？ それにヤヒヤー・イブンⅡザカリーヤーの名前がここで出てくるって？

しかし、男達の方も別の理由で惑乱しているらしい。

「……ちよつと待て下さい、じゃあ、あいつは？」

「あいつって？」

「あなたに命じられて、門番をやっていた小林ですよ」

「あーあ、小林咲慧溜君ね」《阿青》はわざとらしく肩を竦めた。「こちらが通信を入れた直後に強力な通信妨害だよ——『無力化』されたに決まっているでしょ」

その時、《阿青》を除く、すべての人間が言葉を失った。朱乃と男達は、生まれも育ちも異なる。道端ですれ違っても互いに嫌悪感を抱きあうだけであろう。だが、そんな同一の感想を抱いた。

——『無力化』って、どういう意味？

無論、この状況で成立しうる解釈はそう多くはない。

あくまでも軽薄に《阿青》は指摘した。

「まあ、卒業試験としてはこのくらいの難易度は必要でしょう」

突貫、蹂躪、そして、殺戮。

呉羽の戦いはまさにその三語で済む。近代戦の常識を、軍事学の通念を、いや、世界を律する法則すら、嘲うかの如き暴虐だった。

多数の散弾を装填するために伸ばされた筒状の弾倉。そんなものを具えている、大柄ではない呉羽には大きすぎるであろう散弾銃を、しかも、両手にそれぞれ一丁ずつ。

右手の散弾銃には単体弾スラングが装填されているらしく、その有効射程ぎりぎりの五十メートル前後であっても、片手で当ててくる。巨大な口径の単体弾スラングなので、物陰に隠れても、その一発かに二発でその物陰自体が吹き飛ばされ、三発目あたりで、隠れていたはずの人間の頭蓋骨が吹き飛ばされる（呉羽は何故かかなりの長距離であっても頭を狙っていた）。

左手の散弾銃には粒状弾ペレントが装填しているらしく、一足跳びで——それこそ、飛蝗ばったを思わせる尋常ならざる跳躍で——信じられない距離を詰め、逃れのような位置から、一定の空間をまるごと削り取るかのごとく、そこにあった肉体を吹き飛ばす。

あるいはあまりの脅威に怯えて、また、地面に蹲り、震えだした男に無造作に近付いてはやはり頭部に散弾銃を突き付けては零距离射撃を行う。

そんな無造作な——もつと言えば無謀な——戦いぶりなのに、こちらは下手に動けない。

無縁が使えないため、連携が取りにくいのだ。故に分進合撃が上手くいかず、各個撃破されがちになる。

そして、何より最も厄介なのは……。

ばたと隣にいた仲間が倒れた。頭からは血がどくどく流れている。

慌てて、物陰に身を隠し、『狙撃手』の居所を探そうとする。だが、さっぱり、わからない。どうも、亜音速弾頭を使っているらしい。銃弾が音の壁を突破する際の轟音がまったくない。

——これだ。これがあるから、うかつに動けない。

呉羽は堂々と廊下の真ん中に立っているのに、こちらはこそそ身を隠して動かねばならない（それでも、今のように音もなく殺されてしまう）。

——「近代戦において『一騎当千』を体現する人間は二種類しかないわ。一つはこのあたし、そして、もう一つは優秀な狙撃手よ。ただし、あたしと違って、優秀な狙撃手にはたった一人で、戦局を左右する『万夫不当』だったりするから、気をつけなさい」

今更ながらに、あの女の言葉が思い知らされる。正直、呉羽一人なら——まかりなりにも位置が確定できる敵ならば——対処のしようもある。散弾銃の射程は短いのだから、とりあえず距離を置く——極端な話、一度逃げてもいい（そして、散弾銃の有効性が薄れる条件で再攻撃を仕掛ければよい）。実際にそれを敢行した勇者もいる。ところがそいつは真っ先に狙撃されてしまった。

これでは、もう、どうすればいいのかわからない。明確に暴虐を振るっているのは眼前の呉羽だが、それでも位置が特定できる彼女を避けることはできる。だが、位置の特定できない狙撃手からはそれもままならない。存在を認識すら出来ない狙撃手に打つ手はない。

——しかし、存在を認識できる呉羽に対してなら……機会はある。

散弾銃である以上、弾切れは早いはずだ。再装填を行わなければならない。両手に塞がって

いるのにどうするのか——戦術的な好機というよりも、むしろ本能的な好奇心をもって、その様子を覗き見る。

だが、そこにあったのはやはり、信じられないものだった。なんと、あの小娘は、銃身を口でくわえて、開いた片手で装填をこなしていた。仲間の一人がその様子に黙って激昂した。

当然だろう。その装填作業自体が非常識なものだった。四キログラムの銃身をを歯で支えるというのも、異常だが、それ以上に、今、彼女の視界は著しく狭いものとなっている。それなのに呉羽は不安も恐怖も感じさせない平然さを以って、装填作業に没頭していた。それだけ、装填を急いでいるとも見えるが、呉羽には反撃を想定しなくてもいい余裕が垣間見えた。強者故の傲慢があった。

激昂した男が、しかし、冷静に呉羽の背後から、小銃を撃つ。

呉羽の頭部への慎重で確実な発砲。

だが、その呉羽は小首を傾げ——頭部を約四十五度曲げ——ていた、

そして、銃弾はその隣を通り過ぎる。

嘘だろう——という顔を浮かべた男は、刹那の後、呉羽の放った単体弾スラッグでひき肉にされた。

呉羽は振り返ってはいない。背中を向けたまま、右手を後ろに向けて、引き金を引いただけだ。

——理不尽すぎる！

どうして、音より速く飛んでくる弾丸をそう容易く回避できるのだ。まるで予め弾道がわかっているようだった。

そして、呉羽が跳ねる——その髪が女の線を作る。次の瞬間、

「き、消えた？」

男はそう驚いた。実際には、視界の外、認識の外に出ただけだ。身体を捻り、呉羽が動いただけだ。だが、それが男にはそう思えた。

その時、男は理解した。こちらの弾がまるで当たらないのは、あの狙撃によるものではない。ましてや自分達の射撃精度が低いからでもない。幾ら条件が整っているからといって、廊下の真ん中に立っている奴に、訓練を受けた兵士の弾があたらないわけがないではないか！
今と同じ現象が起きているのだ。

「こ、これが呉羽の力？」

——いや、待て。どうして、俺はあの少女の名を知っている。作戦前の打ち合わせの時も相手の個人名までは教えてもらってはいないぞ。

主観と客観がごっちゃになっている。あ・た・か・も・稚・拙・な・小・説・の・よ・う・に。

——だからか？ だから、こちらの戦術も、弾道も、すべて呉羽には看破されるのか？

呉羽の姿は水の中を泳ぐ魚の群れに見えた。

呉羽の動きが空の上で飛ぶ鳥の群れに思えた。

そして、男の腹から下が散弾で吹き飛ばされた。

「おい、生きてるでしょ」

呉羽は下半身だけを吹き飛ばして『無力化』した男を銃口で小突いた。

一番、臆病で指揮官っぽい奴だったから生かしておいたのだ。実際、上手く尋問可能な状態で『無力化』できた。この校舎のような屋内戦闘は呉羽に味方するとはいえ、やはり武装し訓練を受けた相手を殺さずに『無力化』するのは難しい。数秒前まで連中を瞬殺していたのも、その必要があったからだ。手を緩めれば、逆転される恐れは大きかった。というか、髪を振り乱していただけあって、頭がガンガンする。まだ飾り布を解いてこそいらないものの、戦闘による興奮で感覚が敏感になっているのだ。おかげで脳への負担が増している。正直、今すぐ横になりたいが……まだやることがある。

「口を開けるのはわかっている。そういう風に撃ったんだからね」

「助けて……」

「うん。まあ、ちよつとそれは難しいかも」

呉羽は少し反省した。今すぐ病院に運んでも、助かる見込みはない。これでは取引が難しい。とはいえ、やれるだけのことはやってみよう。

「えーとき、あんたらの人数とか武装とか背後関係とか……」

「助けて助けてよ、母さん」

どうやら、男は既に正気ではないらしい。呉羽は「役に立たないなあ」と愚痴った。

同時に予感はず信に変わりつつあった。

連中は発砲する時にも、照準をつけてから、引き金を引くまでに一瞬の時間が空いていることがある。ヤヒヤーや呉羽のような人間には考えられない習性だ。もし、あれが躊躇いなのだとしたら、案外、連中は童貞チエリの集団なのかもしれない。

勿論、あの《阿青》とかいう女は違うだろう。しかし、何とも悲しい話ではないか。

——結局、あたしよりも、あんな連中の方が朱乃には近い。

とはいえ、

「……いたいいけな女の子に手を出したんだ。覚悟くらいは出来ているでしょ——ま、せいぜい苦しみな」

そう吐き棄てて、背を向けた。すると

ポンツ——と表現すべき音が響いた。

男の頭部に穴が開き、中身が勢いよくこぼれていく。狙撃だった。苦しみを長引かせるべきでないというヤヒヤーの慈悲だろう。呉羽からすると、ヤヒヤーはこういうところが甘い。

昔からそうだった。『友釣り』の餌にされた仲間を見捨てられずに、自分の位置をさらす危険を冒しても、その慈悲深さ故に止めを刺したことは一度や二度ではない。

「相変わらずツンデレだねえ」

「六人、八人、あーあ、とうとう九人が『無力化』されちゃった」

どういうわけか《阿青》には『無力化』された人数がわかるらしい。瞑目のまま、芝居がかった調子で呟いている。電波妨害が続いているであろう状況で、何故そんなことがわかるのかはさっぱりだが、少なくとも男たちはその《阿青》の言葉を疑ってはいない。彼らの表情はどんどん変わっていく。

「あ、十一人目、使えないわねー」

「……これで損耗率が五割を超えた」

誰かが言った。それは事実らしい。そして、後から思えば、暗号でもあったのだろう。

朱乃はこめかみにひんやりしたモノを感じた。『下卑た笑みの男』が朱乃に銃口を突きつけたのだ。

「……その娘に触っていいなんて、誰が言った？」

「もう、あんたにや付いていけない——って事ですよ」

眉を顰める《阿青》に、カタカタと震えながらも、『下卑た笑みの男』は断言する。

「やめろっ！ 山田！」と『冷たい声の男』が割って入った。

「佐藤！ 貴様はこの女の傍にさえいられりや満足かもしれないがなあ」と『下卑た笑みの男』は吠える。「俺はこんなところで死にたくねえんだっ！」

正しいあり方だ——と朱乃は思った。この『下卑た笑みの男』は何度も朱乃に嫌らしい視線を送っていた。一番チンピラ気分が抜けていないと思われる男で、最も朱乃の対極に位置する男だった。おまけに自分に銃を突きつけている。いるのだが、正しい者は正しい。朱乃自身は恐怖に震えながらもどこか冷静に彼を支持していた。

「落ち着け、山田。そんな事しても何も好転しないぞ！」

「阿呆か、お前は！ この女の気まぐれで何人殺されたと思っているんだよ」

「……あれは訓練中の事故だ！」

「どこまで飼い馴らされてんだよ、貴様はっ」そして、『下卑た笑みの男』は頬を引きつらせた。

「貴様、もしかして、この女にマジに惚れているのか？その割ににゃあ、最初にこの女を輪姦^{まわ}うとして、殺された連中とはソリが合わなかったあ。それとも、あれか？ 想い続けていれば報われるってか？ どこまでイかれてやがるんだよっ！ ゴミクズみたいに棄てられるってわかっていて——！」

「だからって、自棄を起こして何になるっ！」

そして、『冷たい声の男』は弁舌を尽くした。チンピラだった自分達をまかりなりにも兵士にしてくれたのはこの人だ。今身に付けている装備だって、本来、自分達如きは触らせてももらえないものばかりだ。おまけにこの試験に合格すれば、一気に直系組織の正規構成員級にまで上り詰められる。そうなれば、もう誰にも馬鹿にされない、消耗品ではなく、専門家として、一人の人間として扱ってもらえるのだ。そのためには危険もある。だが、ここは我慢だ——語彙は貧困で、表現も稚拙だったが、必死さだけは伝わってきた。

だが、『下卑た笑みの男』は冷静だった。

「いや、自棄じゃなくて、計画だよ」

他の三人が動いた。銃口の先は《阿青》だ。

四対一——人質（？）の朱乃がいなくても、圧倒的な戦力比だ。

朱乃は詳しく知らないが、呉羽も校内で自分達よりも多数の敵を倒している。だが、ここまですで一度に数の差を開かせたことはない。狙撃手のヤヒヤーも含め、一度に相手にするのは二対四を限度としていた。それ以上を同時に相手するのは無謀なので、一時離脱し、巧妙に戦力を分散させ、各個撃破するという手法を取っていた（そして、それだけの戦術指揮能力をヤヒヤー——という男は具えているのだ）。

だが、その時の《阿青》は薄く微笑む。

そして、次の瞬間、《阿青》はいきなり男の懐に現れた。

男にとつても、驚きだったらしい。戸惑い、焦り、対応が遅れる。

その間に《阿青》は貫き手を放つ。

織手と呼ぶに相応しい手弱女の指先が、何故か、大柄な男の胸板を抉った。

間違いなく、男は即死だ。

「化け物めっ！」

残る三人の男が一斉に拳銃を発砲する。

だが、その弾丸は当たらない。《阿青》はすべて回避——している？ そんな馬鹿な？

錯覚に違いない。人間が銃弾を回避できるはずがない。拳銃は命中精度に劣るらしいから、男達の射撃が元々不正確だったのだ——と朱乃は無理やり納得する。

そんな間にも《阿青》は動く。心臓を貫いた男を盾にする。「うわ、バッチー」と言いながら

も、残る三人が放つ銃弾の嵐をから——おそらく防弾繊維付きの——死体で身を守る。男は大柄で、女性である《阿青》はすっぱり隠れてしまう。

さらに、そこから、《阿青》は右腕を伸ばした。男たちはそこを狙うが、拳銃の命中精度で《阿青》の細い腕に当たるわけがない。伸ばされた血まみれの手には拳銃（おそらく死んだ男から奪ったもの）が握られているが、頭部は『盾』に隠れたままだ。当然、今の《阿青》は視界が皆無のはずだ。

しかし、伸びた腕は発砲した。しかも、その銃声は一回だけ。

耳を劈く轟音。それが朱乃の真横を掠める。

拳銃という近接武器の命中精度は著しく低いはずなのに。

しかも今の《阿青》の射撃姿勢は最悪とっていいはずなのに。

その銃弾は、朱乃に銃を突きつけていた男の頭部を正確に破壊した。

思わず目を閉じたが、不思議と血液や脳漿の類は、朱乃の方には飛んでこなかった。

すかさず《阿青》は左腕で射刀スロインゲンナイフを放つ（おそらくこれも最初に殺された男の懐に隠れていたものだろう）。

朱乃が気付いた時、その射刀は二人の頭の部に突き刺さっていた。

これは誤記ではない。朱乃も当初わからなかったが、《阿青》は二本同時に、射刀を投擲していた。左手の指で二本の射刀を握り、それらを纏めて別の目標に投げ付け、見事二人の男を殺傷していた。

神業——と呼ぶのが比喩ではない領域である。少なくとも人間業ではない。

朱乃は《阿青》の動きに魚や鳥の群れを見た気がした。

それらの群れは時に『一匹の龍』に思える見事な編隊を組む。人間が編隊を組む時は、海や空はおろか陸上ですら、一定の訓練期間や通信機器が必要なのに、魚や鳥は生まれながらにして、それを成す——何故か？

結局、それが『必然』なのだろう。空の飛び方や海の泳ぎ方を合理的に追求していけば、自ずと同じ形に行き着く。魚や海豚いるかや潜水艦、鳥や蝙蝠こうもりや飛行機——これらは皆異なる起源を持つが、同じ目的のために合理化していき、同じ形状へと至った。収斂進化による相似器官というやつだ。

同様に——合理的な編隊の組み方も『必然』で予め決まっている。海を泳ぐにせよ、空を飛ぶにせよ、効率の良い編隊の種類はそう多くはない。まして、同じ生物である以上、他の魚や鳥の性質は『必然』で予め決まっている。故に魚や鳥は本能でその『必然』に従った合理的な編隊を組むのだ。

彼女の動きはそれに似ていた。彼女を殺そうとする者たちの動きは、あくまでも人体に則つ

たものだ。間接が逆に曲がったり、四肢が急に伸びたりはしない。それは予め『必然』で決まっている。初期条件で既に定まっている。

だから、躲すべき銃弾の軌道も、放つべき銃弾の軌道も、予め『必然』で決まっている。そして、魚や鳥が群れの中でどう振舞えばいいのかわ知っているように、《阿青》は彼らを殺すためにどう振舞えばいいのかわ知っていた。

そして、彼女はそれに従った。

——《ラプラスの悪魔》……？ そんな、嘘でしょう。

朱乃は己の妄想を否定した。そんなことがあるはずがない。今のだって、只の偶然……。

「いいえ、これも『必然』よ」朱乃の心に応えるように、しかし、《阿青》は同じ言葉を繰り返す。「言ったでしょ。あたし、そういう空気を読むのには自信があるの」

「……っ」

朱乃は愕然とした。今の自分の思考まで『必然』だということか？

「とういか、凄いな。もう《理解》したの？……まあ《理》で《解》こうとしていることは、君もあっち側で……才能がないともいえるけどさ。こんなに早いのは、君が二人目だよ。それとも『前例』を知っているからかしら？」

朱乃の脳裏に、零れ落ちた髪が織り成した女の線が浮かんだ。

それだけで《阿青》は悟ったらしい。

「ああ、なるほど——うんうん、それが確認できだけでも、この五人は役に立ってくれたわ」と一人で納得する。

「……四人ですよ」

そこで、今まで事態を静観していた『冷たい声の男』が指摘した。

彼の初めて口答えともいえる。《阿青》も興味深げな視線を向けた。

いずれにせよ、部屋で生き残ったのは朱乃と《阿青》と男が一人だ。

彼は最後に生き残った男であり、唯一《阿青》に逆らわなかった男である。

そんな『冷たい声の男』は驚愕よりも鎮痛が勝っていた。どうやらこの結末を推測した上で、他の男達へそれなりの友愛を持っていたらしい。考えれば、激しく言い争いながらも、この『冷たい声の男』とあの『下卑た笑みの男』は互いに銃を向けることはなかった。

「……佐藤千聖人くん、この部屋から出て行きなさい」と《阿青》は吐き棄てた。「仲間のために助けに行くもよし、自分のために逃げ出すもよし」

「お、俺は……」

彼はそう何かを言いかけたが、結局、口を閉じた。

そして、最後の男はとぼとぼと出口へと歩く。

そんな彼を《阿青》は

後ろから拳銃で撃った。

銃弾を背中に受け、男はゆっくりと、あっけなく、みっともなく……倒れる。

朱乃は思わず絶叫していた。

「どうしてっ、どうして、撃ったのよ！」

「馬鹿なくせに汚いオジサンに疲れることってない？」

「……私はっ！ その馬鹿なくせに汚いオジサンに飯を食べさせてもらっているっ！ そして、私も馬鹿で汚い只の人間だ！ 高潔で特別な人間なんかではない！」

すると《阿青》は口笛を吹いた。

「聴いた？ 今時の女子高生は凄いや。下手をすると、あんたらよりも、大人かも——って、死んでるかー」

そう言っつて、《阿青》はケラケラと笑う。朱乃は《阿青》を睨んだ。自分の立場が悪くなるとか、そういう発想はなかった。

そんな朱乃に《阿青》は呆れるように溜め息を吐き、

「機密維持よ」

と言い訳を始めた。

「それにこの男さあ、目障りだったんだよ、ずーと。あたしの事、嫌らしい視線で見てるし」
——だから、それは彼ががあなたのことを……。

その心中の思いに《阿青》は答えた。はっきりと明言した

「違うね。身の程知らずの欲望だよ」

「どうして、そんなことがわかるのよっ！」

「言ったでしょ。あたし、そういう空気を読むのには自信があるの」

何度か聞いた言葉だった。だが、ここまで怒りを駆り立てたのは初めてだった。

朱乃は激しく首を動かし、わざと眼鏡を外した。四肢はまだ拘束されていたが、その程度のことでは済む。

「あ、雰囲気変わったね」

当然だ。朱乃は眼鏡を外すと、人間の種類や表情をほとんど識別できない。人の顔も心もわからなくなる。その分、朱乃は自身についても他者についても——いつも以上に——斟酌しなくなる。冷たくなれる。

そして、朱乃は冷たくなりたかった。

「あなたの負けだから、自棄になっているのですか？」

「……どうしてそう思うの？」

「人的損失が激し過ぎる。仮にここを切り抜けたとしても、後がないんじゃないやなくて？」

十一人が無力化されて損耗率五割——という一連の情報が正しければ、連中の総数は二十二

人前後となる。《阿青》自身が手を下した者を含めれば、二十二人中、既に十六人を失っている。戦力の約七割を失ったのなら、いくら非正規部隊とはいえ、戦線を維持できまい。

戦争なら、全滅しようが壊滅しようが、敵を殲滅できれば構わないのかもしれない。が、どうやら、襲撃を仕掛けた呉羽たちは無事なようだ。その上、彼女はあくまでも指導員インストラクターだといふ。それが卒業試験とやらで、それなりに手間隙かけてつくった商品をぶち壊した。その適性を疑われるのが自然だろう。

……と朱乃は指摘したつもりだった。

だが、《阿青》はあつけらかんと答える。

「あ、心配はしなくてもいいよ。ちゃんと保険はかけてあるから」

「保険？」

そして彼女は一枚の紙切れを朱乃に見せた。機械印字されたラテン文字とアラビア数字がぎっしりである。英文だったので、把握するのに多少時間が必要だったが、とりあえずそれが信用取引の記録明細だということは理解できた。

——売却高は……一株平均12.62ドル×85万6400株だから、1080万7768ドル……ドル？　じゃあ、大体十億円って事？

しかも、その取引銘柄は——*keikutsu school*——この学園の発行している株式だった。

「……予め空売りしているってこと？　どの道、この騒動で一時的に株価は暴落するだろうから、確実に利益を出せると？」

「そそ。先物取引といい、信用取引といい、最近じゃあ、まるで投機みたいに扱われているけれど、本来はこういう風に保険として使うものでしょう」

「……新興市場とはいえ、値幅制限は結構きついわ。どれほど利ざやを稼げるかは疑問ね。そもそも、ちゃんと回収できるのかしら？　これでああなたは治安機構だけでなく、金融庁も敵に回すことになるのよ」

「……君、やっぱりいいなあ」

そう言つて、《阿青》は朱乃に顔を近づけてきた。吐息が頬にかかるほどの距離なので、あの極上の黒髪の香りに思わず胸が高鳴る。

「ね、やっぱりあたしと組まない？」

「は？」

「君の言う通りよ。謎の銃撃戦と時期を同じくして、出所の怪しい大量の空売り——今時、漫画でも流行らないわ、こんな陳腐な手は。あたし自身の身柄はともかく、口座の方は凍結される危険も大きい。最近、金融庁の権限は極めて強力になっているしね」

「……対策はとつてあるんでしょう？」

「そういう風に少しでもあたしから情報を引き出そうとするとところが素敵」

「……恐怖で発狂しそうなだけ。だから、話していないと不安なのよ。あるいは現実感がない

だけなのか」

「あらあら、この状況でちゃんと演技ができる。本当に怖い娘ね。お姉さん、震えちゃいそう」
ふるふるとわざとらしく震えながら、《阿青》は両手を組む（例によって胸元が強調される）。

「まあ、だからこそ、あたしは君を誘っているんだけど」

「どういうこと？」

「言葉通りの意味。あたし一人では何事においても限界があるのよ。今回だって、口座が凍結される前に、預金を移転させる人間がいてくれれば、随分と今後の予定が楽になるの」

「……」

「信用獲得のために言っておくと、今回は簡単なプログラムに口座処理を任せているわ。ただし、金融庁も無能ではない。下手をすれば回収前に口座凍結されるでしょうし、あたしの足も付きやすくなる。でも、無機質なプログラムではなく、信頼できる人間にこの仕事を任せられれば、より柔軟に状況に対応し、不必要な危険を回避できる」

「それが私だとも？」

「そうよ。勿論、今回の件では間に合わないだろうし、慣れるまで時間もかかるだろうけれど、今後金勘定を一任できれば、十分にお釣りが来る。ううん、財布のことだけじゃなくて、一切万事において、あたしが前に出ている間の後ろの支えに、さ」

「……女房役が欲しいなら、そこに転がっている殿方から、誰か一人を選べばよかったんじゃない？」

「あんな連中じゃ駄目。頭が悪すぎる」

「『知者を見い出すにはまずその人自身が知者でなければならぬ』わ」

「エンペドクレスかあ、渋いね。でもその通り、あたしは知者ではないからね。だからこそ、君に来て欲しい」

「……それはあたしだって、似たようなものよ」そこで、朱乃は俯いてしまった。「会計技術は教え込めばいいんだし、暴力沙汰は慣れているし、私よりもずっと適任でしょう」

「そんな技術や経験の問題ではないの。《マインドセット心がけ》の問題——ねえ、あなたは異世界に行きたい類でしょう？」

その時、朱乃はどうして彼女がここを監禁場所にしたのかがわかった。

悔しかった。自分はそこまで価値ある人材ではないと告白したくなった。それなのに自分をそこまで評価してくれる彼女に感謝したくすらなかった。

違う。どう考えても違う。それは拉致監禁の被害者の抱く思いではない。

今この部屋は屍で満ちている。校舎すべてに死臭が漂っている。

その原因はこの女に由来する。当人も否定はしまい。

だが、授業中の、あの頭をずっと抑え付けられているような圧迫感に比べれば……。どうせ自分はどこにも行けやしないという絶望感に比べれば……。

「一緒に行こう。ね、たとえ、世界の果ての荒野でだって、きっと幸せに生きていける。二人でなら」

朱乃の頬を阿青の両手が挟む。

唇を奪われる——と思って朱乃は眼を閉じた。

しかし、彼女の顔は朱乃の横を通り過ぎた。温もりが吐息と共に耳元から伝わる。

「あたしがあなたを守るから」

それは優しい言葉だった。朱乃は彼女を己の半身としたいとすら思った。

そして……、

そんな自分に屈辱を覚えた。

拘束された体を精一杯動かして、朱乃は《阿青》を突き放す。

「……笑わせないで。追い詰められて、私にストックホルム症候群でも期待したわけ？」

「信頼できる誰かに傍にいて欲しいと願うのはおかしいことかしら？ この《ミッション》が終ってからでもいいから……」

食い下がる《阿青》が言い終わらぬ内に、朱乃は拒絶を明確にする。

「お断りよ」

「そ」

結局、《阿青》は残念そうな顔で、銃口を向け、躊躇うことなく、引き金を引いた。

耳を劈く轟音が再び朱乃を襲う。

次の瞬間、手錠が砕けた。

だが、朱乃の腕も身体も傷一つない。

既にその命中精度は疑問ではなかった。行動理念だけが疑問として口に出た。

「……どうということ？」

「君を確保するだけの人手がなくなったって事」

自分で殺しておいて——と朱乃は思ったが口にはしなかった。

「とりあえず、この学校からは出た方がいいわ。流れ弾に巻き込まれるかもしれないから」

「……その前に、この部屋から出る瞬間に撃たれそうで怖い」

「女の子を後ろから撃ったりはしないよ」と、彼女はまるで信用の置けない話をする。「終わったら、迎えに行くから、待っていてね」

朱乃は無言で背を向け、眼鏡を拾う。

これを付けていたら危なかった——そんな事を考えながらも、全力で駆け出す。

それに気付いた呉羽は大きく息を吸った。まだ電波妨害は続いている。無線は使えない。だから最も原始的で効果的な通信手段——大声を出す。アラビア語で叫べば、少なくとも、ヤヒヤー以外の男性陣には内容を理解できないはずだ。

「ヤヒヤー！ 理由はわからないけれど、朱乃が解放された。そっちの方が距離も近い。対処して！」

……その時、当然、呉羽の見える位置に朱乃はいなかった。言葉の通り、ヤヒヤーの方が朱乃に近い位置にいるのだ。だが、それでも呉羽には朱乃の状況を把握した。

だから——なのだろう。

後から知ったことだが、彼女ではなく、彼が朱乃の前に現れたのは、それこそ『必然』だった。

廊下でばったり出会って、物陰に引きずり込み、ヤヒヤー・イブン・ザカリーヤは開口一番に尋ねた。

「Let it all right
「無事か？」

「あ、あの……」

少なくとも『all right』ではないと朱乃は思った。だが、その後続く

「^{o h} ああ、英語は話せるか？」

の一言に、随分と落ち着いた。大体、このヤヒヤーは彼自身の母語らしきアラビア語ではなく、わざわざ英語で話しかけてくれたのだ。無論、朱乃は決して、英語が得意ではない。だが、件の『ハーイ、オジヨウサン、イクラ？ ワタシ、ジュウマンマデナラダセルヨ』という水準の日本語だと、かえってやりにくい。

だから、これは彼の配慮なのだろう。この男が意外と繊細なのだと気付いて、朱乃は大きく息を吸った。

「^{I am weak in English} 私は英語は苦手。 ^{Please talk slowly and grammatically} お願い、ゆっくりと文法的に話して」

これで、通じるか？——と不安になった。だが、通じてもらわなければ、困る。繰り返になるが、英語は得意でないのだ。朱乃も塾生学園にいる以上、日本の平均的な高校一年生よりは英会話力も高い。しかし、母語話者並みの呉羽と同じ調子で話されては困る。おそらく思考言語を英語へ切り替えられる程に熟達しているヤヒヤーの方で、朱乃に合わせてもらわねばならない。

情けない話だ——と朱乃は唇を噛んだが、ヤヒヤーはむしろ満足げに笑った。

「^{Let's go} わかった。行くぞ！」

そして、振られたばかりの《阿青》は瞑目したまま、それを確認する。

「んー、これで朱乃ちゃんの安全は確保されたし——御邪魔虫を先に始末しますか」

この時、《阿青》は拳銃しか手にしておらず、向こうは散弾銃を握っている。武装を比べれば、不利である。

だが、相手は喜んではいなかった。

何事も理詰めで考える男は僥倖すらも不確定要素として嫌う。この時点で自分と交戦する事は計算外であり、それを考慮すれば、偶然による有利など吹き飛んでしまう。

彼女はよつぼど、彼の指揮下で戦うことで慣れていたのでだろう。戦術を立案したであろうヤヒヤーと似たような反応を示した。

「はい。はじめまして、よろしくねっ」

すなわち、体勢を整え、銃口をこちらに向けながらも……。

呉羽は恐怖に囚われていた

駆ける。駆ける。駆ける。

日頃はなんでもない校舎の廊下が今の朱乃にはとてつもなく長く思える。

もう駄目だ。この際、ここで転んでしまう。当人の言動と呉羽の証言から、この『ヤヒヤー・イブン』ザカリーヤー』がお人よしなのは明白だ。ひ弱な少女である朱乃が転べば、一度、休憩することを思案してくれるに違いない。

そんな情けない考えが朱乃を支配しかけた時、ヤヒヤーは声をかけてきた。

「負傷したか？ 顔が青いぞ」

「いや、私は男性恐怖症なので……」

「よし、そんな軽口を叩けるようなら、大丈夫だな」

「……どいつもこいつも……」

朱乃は唾棄した。ヤヒヤーはくつくつと笑う。

あるいはそれが大人の余裕というものだったのかもしれない。

その直後に、彼は朱乃を狭い一室に誘導し、手早く安全を確認する。その上で、「少し、休憩だ」と言ってくれた。

朱乃はパタンと腰を付けたが、ヤヒヤーの方は何やら、出入り口でせわしなく動いていた。どうやら、即席の罠を造っているらしい。

手伝えることは——あるわけがない。朱乃は所詮無力なのだ。第一、限界を超えた疾走で、今の朱乃はまともに歩くことも出来ない。一方、文学少女の遅い走りに付き合ったせい、ヤヒヤーの呼吸はまるで乱れていなかった。呉羽と同じだ。つくづく己の脆弱さが嫌になる。そこでふと、以前起こった暴行事件を思い出した。

加害者は二名——無職の少年と塗装工の少年。

被害者は一名——工業高校生。

そして、加害者が被害者を呼び出して、殴る蹴るの暴行を加えたというものだ。

動機は怨恨——被害者が携帯電話のサイトへ行った『ウザイ』の書き込みに、加害者の逆鱗に触れたらしい。

笑えたのはこの事件が新聞の記事分類では『知能犯』とされたことだ。

一連の行為にまったく知能は感じられないが、しかし、これが知能犯に分類されていたのだ。

——そう、彼らは知能犯に成れたのだ。

「中等部の時にね、やたらと殺人について調べていた娘がいたの。まあ、薬物や銃器についての情報収集にも励んでいたけれどさ。基本的には連続殺人者に強い関心を抱いていたみたいね。政治的主張や経済的事情を伴わない——そう、殺人そのものを目的とした殺人、あるいは死に見入られた心の闇とやらが好みだったみたいね」

独白のつもりだったが、彼は相槌を打ってくれた。朱乃を落ち着かせるために、話を聞かされているのかもしれない。

「中々、珍しい娘だな」

「そ、結構、ざらにいるわよ、こういう娘って。少なくともこの国では。まあ、私は女子校育才だから、なんとも言えないけれど、多分、男子にもいると思う」

「……どうしてそう思う？」

「お手軽だからよ」朱乃は即答した。「壊す事と創る事を比べると、創る事が圧倒的に困難であるのに対し、壊す事は子供にできるくらい容易だから。無能な人間には創ることはできない——でも、壊すことはできる」

ヤヒヤーは罾の設置に忙しいのか、黙って聞いていた。

「この手の犯罪——陳腐に猟奇殺人と呼ばれるモノは特にお手軽よ。弱い相手を選べばいい。無防備な時機タイミングを狙えばいい。誰にでも出来る。どんな無能な人間にでも出来る——それこそ、非力で脆弱な小娘にだって出来る」

復讐や略奪、あるいは防衛や正義といった目的による殺人とはそこが違う。

復讐や略奪が目的なら、相手は選べない。腕っ節が強かったり、刃物を持っていたり、仲間ターゲットに守られているかもしれない。そんな奴らに挑まねばならない。

防衛や正義が目的なら、時機は狙えない。襲い掛かっている暴漢は体調や武装、そして人数を整えてくるだろう。それを返り討ちにせねばならない。

いずれも、困難である。そういった一定の動機（ある種の秩序）に基づいた殺人とは、他の秩序的行動と同じく容易くはない。秩序を建設し、維持するという点では、創造的行動であり、創る事ゆえの難しさがあるといえる。

逆に、これらの秩序に基づかない殺人——殺人そのものを目的とした猟奇殺人の類は楽なのだ。

「『かれらが暴力団事務所やチャイニーズ・マフィアの根城、米軍基地に包丁一本で切り込むというのなら、私ももつとべつの観点から配慮することが出来るが、そんなことはまずあり得ないことも分かっている』——おっと、酒見賢一なんて知らないか？」

「……彼我戦力比を考慮せず突撃するのは無謀だよ」

ヤヒヤーの指摘も、朱乃には見当違いにしか思えなかった。

彼は所詮兵士だ。彼の言葉は戦士の言葉だ。戦う事で、何かを達成しようとする者の言葉だ。

ミッション・サクセス
目標達成を志す者に特有の建設性や計画性が伴っている。だが、それでは駄目なのだ。殺人を『何か』を達成する手段にしていけない。

何故なら、その『何か』へは絶対に届かないから。

そもそも、その『何か』を手にするにはあまりにも無力だから。

——でも、この男にはわからない。

だから、彼の言葉を見無視して、朱乃は話を結論へと導く。

「自分は猟奇殺人者に立ち向かうカッコイイ主人公になることはできない。というか、そんな主人公になりえるのはほんの一握りの人間だけ。でも、猟奇殺人者そのものになら、誰にだってなれる。自分にだってなることができる」

「……そして、破滅するのかわ？」

「そうよ。だって、そんな女には破滅しか待っていないじゃない。どうせ、どこにも行けやしない。何も掴めやしない。ただ老いさばえていくだけ。だから自棄になる。虚無に陶酔する」

そして、朱乃は精一杯の蔑みを込めて笑った。

「実に下らない小娘なのよ」

するとヤヒヤーは失望をあらわにする。

「……君が心理分析のような新興宗教に溺れる娘とは思わなかったよ」

「お嫌い？ 新興宗教も宗教のうち——自己救済の手段としては、まあまあよ。『あいつが私を嫌いなのは《幼少期の心的外傷》故で、私は悪くはない』とか適当な妄想に浸っていれば——その妄想への揺るがない信仰心を抱き続けることができる限り、幸せでいられる。《幼少期の心的外傷》の代わりに《実経験》やら《コミュニケーション力》やらの思考停止用語も充実しているしね」

朱乃は興奮故に、饒舌の極みに達していた。それを嗜めるようにヤヒヤーは口を挟む。

「自己の救済を求めるのは悪くない。だが、そのために他者の存在を貶めるのはいかげなも

のか？ 実際、君は今の話に出てきた娘を見下すことで優越感に浸っているように思える——これも私の主観に過ぎんがね。だが、もし、君が彼女の心理を見下しているのなら、それは君が創造した妄想の上の彼女を見下しているだけだ。自分の嫌いな奴を、自分で書いた小説の中で叩きのめして悦に浸るようなものだ」

「問題かしら？」

「ああ。前途ある若者が下らん自慰に耽るといのはな。君がそれを口外しない限り、君自身の精神の自由ではあるが——品性には欠けるな」

朱乃は狂ったようにくつくつと笑った。

「それがまったく問題ないのよ。だって、これは——一昨年までの私の話だから」

その一言で、ヤヒヤーは悟った。この娘が誘拐された理由も、それを解放した真意をも。

「……『あたしがあなたを守るから』とでも言われたか？」

朱乃は息を飲む。「何故知っているの？」

俺も昔、同じ事を言われたんだよ——とはさすがのヤヒヤーも言えなかった。

「……まあいい、とりあえず、君を安全な場所へ移すのが先だ」

すると、朱乃は子供のように駄々をこねる。

「いいえ、私はどこかに隠れていればいいわ。それよりも呉羽を助けてあげて」

「……おいおい……」

あまりの荒誕さにヤヒヤーは呆れ、そして迷ってしまった。

——やはり、無理にでも遠ざけるべきか？

そもこの朱乃という少女の呉羽への視線をヤヒヤーはあまり好ましく思っていない。それはこの事件に巻き込まれる前から、考えていたことだ。

呉羽にとって、朱乃はよい影響を与えるだろう。しかし、その逆は真ではない。結局のところ、ヤヒヤーにとって、朱乃よりは呉羽が大事だった。だから、黙っていたものの、やはり、二人の付き合いを認めるべきではなかったのかもしれない。

当初からヤヒヤーは朱乃を見る度に

——彼女は子供だ。年齢ゆえにやむをえないが、呉羽よりも。

と危惧していた。たとえ、それが年長者の傲慢だとわかっていても。

ヤヒヤーは子供が純粹だという意見には賛同するが、想像力が豊かだという意見には賛同し兼ねる。

想像力といっても、人は無から有を生み出すわけではない。あくまでも、外界から取り入れ

た経験情報を内部再構成するに過ぎない。しかし、それが著作権法に触れなければ、それは概ね『想像』と呼ばれる。

勿論、その内部再構成に必要な処理能力という点では、中古のHDDが新品のHDDに劣るように、子供は大人をはるかに上回っているだろう。また、知性という名のソフトウェアの優劣も重要な因子であろう。しかし、基盤情報となる経験がなければ、やはり、話にならないとヤヒヤーは思う。

実際——酷く恥ずかしい話であるが——子供の頃、ヤヒヤーは『阿青』に憧れていたのだから。

それは、少年らしい恋心もあつたのだろう。美しい黒髪をふしだらな程に露にした年上の娘に、憧れるという方が無理である。

しかし、それ以上にあの圧倒的な暴虐の化身としての『阿青』に魅かれていたのである。すべてを蹂躪していくあの女の姿に

——自分もあのようにになりたい。
とまで、考えていたのである。

あれは無知から来る子供の純粹さだった。

失うことの辛さを知らなかったが故に、蹂躪されるものの辛さに『想像』が及ばなかったのである。

愚かなるヤヒヤーは失う側に回るまで、その事にまるで気付かなかつた。

勿論、朱乃はヤヒヤーではない。少なくとも、あの頃のヤヒヤーよりもはるかに知的で健全である。ヤヒヤーと違い、朱乃は『彼女』のようになるとはしていない。

付け加えるなら、ヤヒヤーは——自分は経験が豊かなのだ——という思い込みで、その優越感を他者にも共有してもらおうなどと考えているわけではない。

しかし、血の匂いに惹かれるのは、やはり、無知の証でしかないのだ。

だから、無知ならざる両親は自分を彼女から遠ざけようと苦心していた。

「……」

両親、そして最愛の妹……家族の影がヤヒヤーの善性を翳らせた。

——いや、言い訳は良くない。それこそ、家族の名誉を傷つけることになる。

結局、この『ザカリヤの息子であるヨハネ』は人殺しのろくでなしなのだ（聡明なこの少女なら、とつづくに偽名の可能性を勘繰っているだろう）。だから、『ヤヒヤー』は少女の安全よりも自身の復讐を優先した。

「わかった。君の保護を後回しにする」

「ありがとう」

「例を言われる筋合いはない——どの道しばらくは様子見だしな」

「呉羽を助けには行かないの？」

「必要な助力は終えている」

これは嘘ではなかった。呉羽にとって危険なのは、二重の意味で射程外から狙撃されることと飽和攻撃である。だが、その可能性は既に潰し終えている。狙撃地点の確保と制圧、それに分進合撃の無力化——叩き込んだのである戦術も含めれば、もはや呉羽にヤヒヤーに手助けは不要である。

「それに呉羽はこういった屋内戦闘では無敵に近い。まして、今回は予め内部構造を熟知しているからな」

「でも、多分、敵はまだ十人以上いるよ」

何故、具体的な人数を知っているのかは疑問だったが、彼女の不安は杞憂だった。少女を安心させるためにも、ヤヒヤーは説明し始める。

「問題ない。どの道、通信は遮断してある。練度の低い敵では連携を取れない。数が多くとも各個撃破可能だ。同士討ちすら期待できる」

「さつきから、電波状況が悪いのはそのため？　でも、連携がとれないのはこちらも同じじゃないの？」

「俺は同士討ちする程の新人ではない。呉羽は通信がなくても連携が取れる」

「——へえ、じゃあ、その理由、説明してもらえる？」

朱乃は蠱惑的な声で尋ねる。

そこでヤヒヤーは自分が言説を誘導されたことに気付いた。

「まあいい……ここまで酷い目にあつたんだ。君にも知る権利くらいはあるだろう」と散々前置きした後、ヤヒヤーはようやく種明かしを始めてくれた。

「呉羽は仙術センジュツが使える。その結界の中なら、そう易々とやられないということだ」

「センジュツ？　戦術？」タクテイクス

「この国では《山の人の術》と書くらしいな」ヤヒヤーは空中を指でなぞる。「まあ、名称はどうでもいいか。東トルキスタンでは『悪魔の似姿』デヴァイルス・イミテーション。人民解放軍からは『絶対佳人』ジ・ユ・ホ・ウ・イ・シ・レ・ン。とどのつまり、あいつは一種の『仙女』なんだ。……ちなみに俺の一押しは『反アスペルガー症候群』Anti-Asperger Syndromeなんだが、どう思う？」

「知りませんよ。というか、『絶対佳人』って何ですか？」

朱乃の記憶が確かなら、『絶対佳人』には『国士無双』の対になり、それぞれ新婦と新郎を示す用法があつたはずだ。昔の中国の結婚式などで、新郎新婦の有能さ秀麗さを『国士無双』『絶対佳人』と褒め称えるのだ。ならば、当時から『絶対佳人』たる呉羽の隣にいたらしいこの男が『国士無双』なのか？

それを考えると朱乃の精神は穏やかではない。

「佳人というのは少し誇張が入っているな。別にあいつの容貌はそれ程整っているわけではない。ただ、男社会の中では若い娘というだけで、目立った。そういうことだな」

「……見てない振りして、ちゃんと見てるんですね」

朱乃の言葉には棘があったと思う。が、ヤヒヤーは「俺はあいつの保護者だからな」とそれに気付く気配すらない。あるいは漢字文化圏の出身でないヤヒヤーは『絶対佳人』の意味を理解していないのかもしれない。

「いずれにせよ、『絶対』の二つ名は伊達ではない。あいつは【空気】が読めるんだ」

「空気？」

「有り体に言うと、銃弾を躲せたりする。まあ、正確に言うと、予め飛んでくる銃弾の座標や運動量を把握したりする。それを前提にした位置取りをすることで、傍目には音速の一撃をも回避しているように見えるという寸法だ」

「……恐ろしく、目がいいっていうわけではないんでしょう？」

「二〇一四年に発表されたいわゆる視覚性擬似時間加速理論とは違う」と、ヤヒヤーは首を振った。「そういうものではない。多分、あいつは……」

「……真後ろにいる人間の識別ができる？」

「驚いたな。わかっていたのか」

「理解はしていない。推測をただけ」

「そうか——やはり君は聡明だ。呉羽にもその一片でもあればな」

「……随分評価が低いのね」

「幼馴染が悪の秘密結社に改造人間にされたから——という理由で傭兵募集に加わる人間に聡明さを期待できると思うかね？」

「……………」

あれが嘘ではないことに朱乃は衝撃を受けたものの、顔には出さなかった。

「ま、そんな小娘が戦場で生き残れたのは、その中で【空気】を読めるようになっていったからさ。元々素養はあったみたいだしな」

【空気】……ねえ、実は私には呉羽の他にもう一人、心当たりがあるんだけど」

その時だった。

「ヤヒヤー！ 電波妨害を切つて！」

今度の呉羽の大声はヤヒヤーだけでなく、朱乃にも理解できた。何しろ、英語だったのだ。

刹那の間も挟まずに、ヤヒヤーはそれらしき機具の電源を切る。

「……………」

「条件がこれまでとは逆になったということだ」

つまり、電波通信などの連絡手段は【空気】が読める人間にとっては不要だが、それが出来ない他の人間にとっては必要である。逆にそれを封じる電波妨害は、空気が読める人間の優位性をさらに強める効力があるのだ。

実際、呉羽はそれを使って、空気が読めない人間を『無力化』していったらしい。だが……、「ここにきて、呉羽は自分よりも空気が読める敵に出会ったということだろう。だから、空気が読めない人間の意思疎通や状況把握を補う電波通信を回復させることで、その優位性を減衰させ……」

「……今、あなた『呉羽は自分よりも空気が読める敵に出会った』って……」
そこでヤヒヤーは通信端末を手にとる。呉羽からの通信だ——と勘付いた朱乃は言葉を控えた。

それを確認した上で、ヤヒヤーは通話を始める。

「状況は？」

『It's the worst最悪』という英語はまぎれもない呉羽の声だった。『まるで勝てる気がしない』

「まだ五体満足だな」

『なんとか——でも、弾が切れたら、逃げ回ることすらできない』

「……条件3から5は達成している。それを使って、所定地点5あるいは6へ誘導してくれ。

俺は……」

『朱乃を保護しているんでしょ。【空気】でわかる。なら、下手に動かないで。どの道、接敵されたら、終わりだから』

「了解。状況6から状況8まで待機。案件Aは破棄。Mを優先する」

『そりゃあいい。あんな胡散臭いシステムより……うわ、近づいてきた』

「なら、無駄口はよしておけ」

『了解』

そして、ヤヒヤーは苦渋の顔で、通信を終え……そのまま動かなかった。

「助けには行かないの？」

「……聞いた通りだよ」

一分も立たない間に、随分と年老いた顔になったヤヒヤーは、疲れた声で補足した。

「ああ、ついでに言えば、君の心当たりは多分正しい。あの女と呉羽は同類だよ」

狙っている余裕はない。構え、引き金を引いたまま、銃口だけを動かす。正直好みではないオートマチック自動連射だが、こうゆう時は頼りになる。

だが、《阿青》はそのすべてを躲している。

それどころか、その嵐のような粒状弾の間隙を縫い、彼女はじわじわ近づいてくる。

——嘘でしょ、散弾銃を全自動でぶっ放してのよ！ それも学校の廊下という閉鎖空間で！
それが足止めにもならない。まるで、物理法則そのものを敵に回しているようだ。

だが、ここで呉羽は一つ思いついた。《阿青》は呉羽に近づいてきている。逆に言えば、近づかねばならないのかもしれない。実際、彼女は小銃の類を彼女は手にしておらず、隠し持っていた拳銃がせいぜいだろう。

散弾銃を持っている自分がそんな相手から逃げ回っているというのは、情けない話だ。が、はつきりしていることもある。

それは狙撃がありえないということだ。同じ仙女ゆえだろうか、戦闘思想は呉羽に近い。すなわち——ぎりぎりまで接敵して、確実に仕留める。呉羽も似たようなものだが、彼女のそれはより先鋭化している。

——確実に近づいてくれる。なら、射程を犠牲にしても、弾丸の拡散率を上げれば……。

迷う暇はなかった。

粒状弾を装填した左手の散弾銃の銃身に、単体弾を装填した右手の散弾銃の銃口を押し付ける。

さすがの《阿青》もこれには怪訝な顔をする。だが、歩みは止めない。

呉羽も急いで、認識を集約し、感覚を収束する。一時的に無防備なるが、低合金鋼の【筋目】を探すには相当な精度が必要になるのだ。

——あった。ここっ！

そして、引き金を引く。

至近距離で炸裂する爆音、そして、左手の散弾銃が砕け散る衝撃。

即席の『《短く切り落とした》散弾銃』が完成したのと、《阿青》がその射程に入り込んだのはほぼ同時だった。

細い腕を振り上げ、《阿青》は貫き手を繰り出す。

間一髪、呉羽は左手の引き金を引く。

轟音。

散弾の利点は広範囲に有効であることに尽きる。だから、小銃のようにしっかりと狙わずとも、距離さえ近ければ命中し易い。

だが、この時の呉羽は狙いどころか、構えすらまともに取らなかった。《阿青》が間合いに入った瞬間に発砲している。

それだけ余裕がなかったのだ。が、それが功を奏したかもしれない。

散弾という性質上、接近すれば接近するほど、有効範囲が広がるので躲し難い（銃弾を躲すという発想そのものが本来異常なのだ）。いくら、《阿青》の回避能力が化け物じみてるといえ、その《阿青》自身の貫き手が届くまでに接敵すれば、散弾の有効範囲は極めて広くなる。

しかもこの時、左手の散弾銃は《短く切り落とす》状態にある。銃身を短くすることで、ただでさえ長いとはいえない射程はさらに短くなるが、その代わりに散弾はより大きく広がる。もはや前方一八〇度はそのほとんどが銃弾の嵐で埋め尽くされると言ってもいい。

——しかも、ほぼ零距离……これならっ！

だが……。

「あのさ、問答無用であたしを挽き肉にしようなんて、せつかち過ぎない？」

そこには無傷の《阿青》の姿があった。あの異様に長い黒髪を優雅にかき上げている。呉羽は絶望に崩れ落ちそうになるのをこらえるので精一杯だった。

「大体、あなただって『同類』に会えたのは久々か、下手をすれば、初めてでしょ。せめて、ちよつとくらいは話し合おうとか……」

余裕に満ちた《阿青》の声がそこで途切れた。

ほんの少しだけだが……《阿青》のかき上げられた髪が散ったのだ。

彼女は忌々しげに舌打ちする。

わかっているのに、避けられなかった。かすってしまった——と言わんばかりだ。いや実際、呉羽にも完全回避を達成されたかに思えた。

——『反応』に身体が追いついていないの？

いや、この『反応』に追従できる肉体を持つ呉羽の方が珍しいのかもしれない。

呉羽はあえて、肉眼に頼って相手を観察してみる。

——……ぼ、ボインボインでハアハアね。その癖、腰は細いし……。

だが少なくとも、アスリート競技者のような引き締まった肢体ではない。ならば、本来の運動能力もそれ相応のはずだ。

ヤヒヤーのいうこのAASは、反応を鋭敏にさせ、挙動を最適にさせる。しかし、基礎的な筋力などを向上させるものではない。肉体を極限まで効率的に活用できるから、『超人的』な存在になれる。が、『超人』になれるわけではない。

決して物理法則を捻じ曲げているわけでもないし、生物化学に基づかないエネルギーを發揮しているわけではない——と思う。

ヤヒヤーたちには『瞬間移動』に見えるらしい現象も、その正体は一種の見せ掛けフレイメントである。確かに呉羽のそれは（そしておそらくは《阿青》のそれも）速く細やかで巧みだ。ヤヒヤーたちの前でやれば、まるで煙のように消えたと思わせる事ができる。が、第三者視点で、録画した画像を見せてやれば、『ああ、そう動いていたのか！』とネタがばれてしまう。

仙術と呼ばれることもあるが、実態はせいぜいが幻覚である。あくまでもヒトの盲点を付き、

錯覚を引き起こさせるに過ぎない。

つまり——疲れるものは疲れるし、力負けする時は力負けするのだ。

呉羽がこの『反応』を身に着け始めた頃、ヤヒヤーは口を酸っぱくして「あまり『反応』に頼るな。お前の真価はその『反応』ではなく肉体だ」と言っていたが……。あれはこういう事なのか？ あの頃の呉羽は一応首肯しながらも、この『空気を読む』力に欠けるヤヒヤーの嫉妬ではないかと邪推していた。だが、なるほど、ヤヒヤーの言うことに間違いはない。しかし、——それでも当たらない！ それでも避けきれない！

頬を引き締めた《阿青》は冷徹に近づいてくる。間合いは既に近接戦闘から近接格闘まで詰まっていた。最早、回転式拳銃すら抜けない。そのため、散弾銃のおかげでかろうじて保たれていた劣勢が敗勢へと推移する。

こちらが繰り出す手足は悉く避けられるのに、あちらの手刀は既に呉羽の筋肉を何度も切り裂いている。幸い重要な神経や骨格まで食い込んでいないが、かなり太めの血管を何度かやられていて、すぐ対応する筋肉を収縮させて止血しているものの、この『余技』がなければ、確実に失血死している。

——やっつけてられるか！

呉羽は足刀を出した勢いでそのまま後方に宙返りする。当然のように足刀は避けられたが、これは計算済み（むしろ、足を捕まれないか心配だった）。宙返りの最中に、左手で床に手を着き、右手で射刀を握り——足による着地が完了する前に——投擲。姿勢が不安定でも、仙女たる呉羽なら、軌道を制御できる。

二度とは効かないであろう奇手であったが、それでも、呉羽は首ではなく、左足を狙った。腕が届く範囲なら、軽くないなされると踏んだのだ。回避されても、体制を崩すぐらいはできるし、宙返りも含めて、距離を稼ぐことはできるはず……だった。

「あら」

その一言で、阿青は射刀を白羽取りしやがった。靴を脱いだ左足の指で。

「嘘っ！」

「はい。お返し」

そのまま、左足の指でこちらに投擲してくる。正確に呉羽の頭部を狙って……。

——今だっ！

その前に呉羽は懐の端末を操作する。

廊下に設置してあった指向性散弾地雷が炸裂。《阿青》めがけて散弾が殺到する。

これには《阿青》も驚いたようだ。何しろ、これを設置したのはヤヒヤーだ。呉羽はそれを無線で起動させただけである。校舎に入る前に地図の前で打ち合わせ、先にヤヒヤーに仕掛けておいてもらった罠の一つだ。

これなら《阿青》も【空気】を読んで回避するのは難しい……はずだった。

しかし、呉羽はその効果を確認せずに、背を向けて駆け出す。

これで時間が稼げたはずだ。が、これで倒せたとは思えない。とっておきを一つ使ったにも関わらず、手ごたえがない。爆風で射刀を叩き落せて御の字である。ならば、今は少しでも距離を稼ぐしかない。

呉羽は逃げる事で精一杯だった。

「つまり、今この校舎では、呉羽と《阿青》——二人の仙女様が戦っている？」

「ああ」

「仙女様なんて、今時珍しい存在が二人も——これは偶然？」

「無論必然だよ」ヤヒヤーは素直に答えた。「俺が呉羽を拾ったのは、彼女に対抗するためだ。彼女に対抗するために、彼女と同じ仙女を——AAS患者を探してきた」

「でも、呉羽も《阿青》には及ばなかった」

そして、だからこそ、《阿青》は呉羽を先に叩いているのかもしれない。

そう考えると、損耗を出しているながら、《阿青》が意に介さなかったことも納得できる。あれは呉羽の力を測るための捨石でもあったのだ。いくら新兵とはいえ、あれだけの数で迫れば、普通は呉羽が負ける（そして、それならそれで《阿青》は指導員としての仕事を全うできるのだから、損はしない）。呉羽が生き残るためには、普通でない力に頼らねばならない。そこで、仙女としての呉羽を見極めることができる。その結果、自分の方が上であり、勝てると判断したからこそ、《阿青》は動いたのだろう。

「元々、仙女としては呉羽の方が下だろうと推測していたさ」

ヤヒヤーの声には落胆はあったものの絶望はない。朱乃はその粘り強さを羨ましく思った。

「第一、あの『反応』は魔法というわけでもない。俺や同業者の知り合いだって、似たようなシロモノは持っている。修練を重ねれば、ある程度までは大概の奴が身に付けられる。まったく修練をしたことのない奴から見れば、いわゆる『超能力』——とりわけ『超感覚的知覚』^[Extrasensory Perception]に思えるかもしれないが……」

^{Tacti Knowledge}

暗黙知というべきか——技術に熟達するという事は、往々にして、そういった面を持つ。

例えば、ヤヒヤーですら狙撃の照準をすべて理詰め——数学的に定めているわけではないという。それこそ、【空気】の抵抗がある状態の弾道を数学的に予測するのは、極めて難しいからだ。

だから、ヤヒヤーとて何故自分の照準で狙撃が成功するのかを『なんとなく』把握している部分が多い。それこそ、銃身が己の腕の延長に思えてくるらしい。呉羽や《阿青》ほどではないにせよ、その『なんとなく』うまくいくための『錯覚』にヤヒヤーも頼っている。

無論、それは気の遠くなるような反復練習の成果だ。

東洋人が箸を使うのと同じである。最初からできたわけではない。何度も何度も失敗し、経験を重ねることで、思い通りに動かせるようになる。そのうちに、箸が己の指の延長に思えてくる。それどころか、箸の先で触れたものを感じ取れるようになる。

そして、仙女はそれをさらに拡張できるらしい。量的にも、質的にも——それこそ【空気】を媒質として、『結界』を展開できる程まで……。

だが、それを言語で説明するのは難しい。長い訓練の間に、いつも間にかできるようになってしまっているからだ。

「逆に言えば、あいつらにしたところで、生まれながらに、その力を具えていたわけではない。あくまでも一定の経験の上で開花した能力——習得可能な一種の技術だ。ただし、あの二人のそれは突出している。努力の類で習得可能なのは『ある程度』までで、それ以上に行こうとすれば、別の要素が絡んでくる。これは仙術に限った話でもないがな」

「……一流に成れるのは才能ギフトのある奴だけってこと？」

「どういう表現をするかは、人それぞれだ。しかし、戦乱ゆえに銃弾に当たって死ぬ兵士や、貧困ゆえに子供を飢え死にさせる母親に向かって、『自助努力が足りん』とほざく勇氣は俺も持ち合わせていない。あえて言うなら『神の思し召し』ということになるのだろうか」

「……」

「それに、一線を越えた連中の実力がすべて等しいというわけではない。努力を重ね、幸運に恵まれて、一線を越えたとしても、その向こう側には、さらに上がある」

「……呉羽は一線を越えたけれど、『阿青』はそのさらに上にいたということね」

「そうだ。しかし、俺たちと呉羽の間にあるのは断絶というべき大きな崖であるのに対し、呉羽とあの女の間の差は——相対的に見ればだが——まだ小さな溝のようなものだ」

朱乃は四人の男を瞬殺した『阿青』の戦いぶりを思い出した。ヤヒヤーが呉羽を助けに行かないのは、結局、あの男たちと似た結末になることを恐れてであろう。そんな『阿青』を相手にまだ生きていられるのなら、なるほど呉羽は大したものだ。そして、

「呉羽の延長線上にあの女がいる。それは間違いない。ならば……」

「……呉羽は『阿青』攻略のための標本サンプルとしては価値があったってわけね」
声音に皮肉の色があった事は否めない。だが、ヤヒヤーは満足げに答えた。

呉羽が『昇仙』してくれたおかげで、今まで謎に満ちていた『阿青』の異能についても、ようやく体系的な調査が可能になった。いかんせん呉羽は飽きっぽく、また仙術という概念そのものが再現性を重んじる科学実験とは相性が悪かったため、不正確な憶測の類も多いが。

「どうも連中が把握している【空気】とはある種の『法則』らしい。全能なるアツラーが記されし世界の理——つまり、石は上から下に落ちる、木は燃えると灰になる、そして、引き金が引かれると、撃鉄が落ち、火薬が燃え、銃弾が飛び立つ——俺のような凡俗では直感的に把握

できるのはその程度だが、仙女は複雑系に対してもこれを適用できる」

「つまり、こう動けば銃弾を回避でき、こう撃てば銃弾を命中させる——とか？」

「ああ。ただしあまりも系システムが複雑になってくると処理が追いつかなくなるらしい」

呉羽が回転式拳銃リボルバーやら散弾銃ショットガンやらの米国人ヤンキーの如き武装を好むのもそれが理由らしい。単純馬鹿が作る素朴な兵器システムの方が『把握』しやすいからだという。あるいは、『阿青』が薄着なのも、異物を少なくし、処理を軽くするため、あるいは気流を読み、それを把握するためらしい。

「……『阿青』の方は只の趣味だと思う」

「同意見だ。呉羽の言い訳もちよいと怪しいがな」

「それでも、呉羽はブラくらい着けているわよ」

話が逸れているとは思いつつも朱乃は指摘せずにはいられなかった。

「胸部の矯正下着を着けないことぐらい大した問題でないさ」

「いや、だって、形が崩れるでしょ。それに大きいと揺れた時痛いだろうし」

「些細なことだ。十年前から、あの女の容姿が全く変化していないことに比べればな」

「待って。彼女——『阿青』は今何歳なの？」

「知らん。一説によると、春秋時代——呉越が覇を争っていた頃、南山で白猿と喧嘩したり、范蠡とかいう男に力を貸して、呉軍を打ち破ったとかなんとか……」

「……それは嘘でしょ」

「俺もそう思う。二千五百年前の中国にいたなど正気の沙汰ではない。……あるいは北宋期に宋江という男へ三巻の……」

「……天書を授けたけど、仲間の救援フラグぐらいにしかならなかったとか？」

「詳しいな」

当然だ。あの『小説』ライトノベルは日本でも三国志演義の次ぐらいに人気なのだから。それにそもそも……。

「それも嘘でしょ」

「はつきりしているのは」とヤヒヤーは要点を述べ始める。「十年前からあの女はあの姿だし、おそらく、十年後も同じ姿であろうということだけだ」

「そんな……」

「俺だっておかしいと思っっているさ。だがそれを言い出せば、呉羽もスリーサイズとやらが、『昇仙』してから微動だにしていななんだ。五十歩百歩だろう」

——……なんでスリーサイズまで知っているんだ？

こんな時だが、沸々と怒りがわいてくる。

「そもそも、あの性格で危ない橋を渡りまくっているのに、呉羽には皺一つ傷一つ増えていない。ああ、『昇仙』する前の首の傷だけが唯一の例外だな。しかし、どう考えたっておかしいん

だよ。人間なら経験するはずの肉体の損耗や劣化を呉羽は悉く超越している——ある種の絶対性の体現者——故に《絶対佳人》」

「……まさに仙女か」

なるほど、そんな呉羽すら越える《阿青》が、神をも恐れぬのも無理はない。仙女ならば、そこいらの地方神などとは格が違う。

——いやまて、どうして、この男は肌の詳細を知っている？

考えてみれば、彼は明らかに呉羽を実験動物と見做し、調査研究の対象としている。ということは、あんなところをじっくりと見たのかもしれない。それどころか、こんなところを舐るように見つめたのかもしれない。いやいや、呉羽は単なる観察対象ではなく、実験動物なのだ。観察するだけでなく、実験もしたのだ。

——つまり……ええっ、そ、そんなことまで……！

冷静になれば、彼女達の仙術はある種の創発現象だ。還元主義がさほど有効とは考えにくく、ヤヒヤーなら解剖学的手法を非効率とするだろう。

とはいえ、朱乃とて十代の少女であり、煩惱に流される事もある。

「くっ、なんて事を……私だってまだしたことないの……」

「……どうした？」

ヤヒヤーは訝しむ。慌てた朱乃は「……いえ、話を進めて」と顔を切り替えた。

「ああ……もう一つ気になるのは、呉羽の言語習得の早さだ。あいつがアラビア語を習得するのにかかった時間が想像できるか？」

「定量的なことは言えないけれど……早い方だと思う」

「一週間で、俺とは英語ではなくアラビア語で話すようになった」

「……早過ぎる」

日本人にとって、アラビア語は習得が難しい言語だ。何しろ、両方の言語に共通点はほとんどない。文法も語彙も文字も音素も何もかもが異なる。その上、同様に異質な英語とも違い、日常における接点が少ない（英語話者にとっても難しいらしく、アラビア語は日本語や中国語と同じく『Superhard language最も難しい言語』に分類される）。

そこで朱乃は授業中の呉羽の様子を思い出した。

「……そういえば、呉羽は英語だけじゃなくて、古文も得意ね。古典教養なんて皆無の癖に、すらすら翻訳している。あれってもしかして……」

「同じ原理だと俺は考えている。だから、その翻訳は非常に流暢だ。しかし、単語単体で意味を述べさせたり、あるいはどうしてそういった翻訳にしたのかという問題をやらせるとまるで駄目だった」

「あくまでも文脈で把握しているだけ。だから、その論理的説明は非常に苦手ということ？」

「ああ、どうも経験則に大きく依存しているようだ」

「仙女の本質は演繹ではなく帰納——それはまた東洋的ね」

「そうだな……というか、君は実にいいな。話が早くて済む」

ヤヒヤーは愉しそうだった。その気持ちは朱乃にもわかる。朱乃もまた愉しんでいたからだ。後から考えてみれば、この時、呉羽は必死に《阿青》から逃げ回っていたはずだ。が、それでも、二人は話を愉しんでいた。

それは朱乃もヤヒヤーも、呉羽とは対極の精神構造をしている証拠なのだろう。

「呉羽はこういう話が苦手だもんね」

「ああ、インテリジェンス インスピレーション 理性ではなく、靈感に重きを置く。俺や君が理解を求めののに対し……」

「呉羽は把握を求める」

「そうだ。『理解』はしていないだろう。ただ、『把握』しているだけだ。赤ん坊が自分の筋肉の仕組みなど何も知らずとも、その動かし方をわかっているのと同じだ。あくまでも、経験則にすぎん。しかし、運動競技の世界にはよく見られる現象だ。あいつが習っていたというこの国の合気とかいうものにも、似たような発想はあるらしい」

そこでヤヒヤーは一つ思いついたらしい。

「ああ、そういえば、この国にはこういう言葉もあったな。たしか、ニュータイ……」

「まあ、それはさておき」その先はとてつもなくまずい気がしたので、朱乃は口を挟んだ。「あるんでしょ、具体的な対策が」

「ああ、どうやら『結界』にも射程があるようだ」

「さすがに無限の情報を処理することはできないのね」

ましてや音速で飛ぶ弾丸を回避しうる『結界』となるとそう広くは張れない。繰言になるが、AAS患者とて、銃弾より早く動けるわけではない。したがって、正確に二手三手先を読んだ動きをせねばならない。発砲された後の銃弾を感知しても、回避は物理的に間に合わない。あくまでも、発砲される前にその弾道を回避する運動を始めねばならない。銃弾を躲すというのは、そういった未来予測に成功したという比喻だ。そして、それを可能にするだけの高精度な『結界』はそう広くは張れないらしい。

「条件にもよるが、呉羽は最大で五十メートルだな」

なるほど——と朱乃は納得した。『呉羽はこういった屋内戦闘では無敵に近い』という台詞の裏づけがとれたからだ。校舎の中で五十メートル以上から狙撃できる地点などほとんどない。問題なのは……

「同じ条件で《阿青》は何メートル？」

ということである。今度の質問に対して、ヤヒヤーはやや口籠った。呉羽と違い、《阿青》の『感覚』は測定する機会がなかったのだろう。ただし、ヤヒヤーは《阿青》の戦闘を何度か見たことがあるらしい。どういう状況だったのか、朱乃は気になったがヤヒヤーがそれらの断片的な記憶から推測すると……

「あの女は最低で二百メートルだ」という事になるらしい。

「そんなに差があるの……」

朱乃は絶望的な差というものを思い知った。距離にして四倍。こういった単純計算が通用するのか否かは不明だが、体積で測れば、その三乗である六十四倍となる。文字通り、桁違いの情報量を《阿青》は処理できるらしい。しかも、これは呉羽の能力を最大に、そして、《阿青》の能力を最低に見積もった場合である。実際にはもっと大きな差があるかもしれない。

「落ち着け。それを言い出したら、俺はまったく空気が読めんだ」

「……自慢げに言うこと？」

「そうだ。俺は空気が読めない。だから、どうした？」

「だからって……」

「俺には空気を読む能力が欠落しているらしい。才能もないらしい。努力しても無駄だった。だが、それがどうしたというのだ？」

唐突に朱乃は悟った。悟ってしまった。

——ああ、この人は強いんだ。こんなにも強い人だから、呉羽の傍にいられるんだ。

「旧約聖書でいうところの『神霊ル・アハの息吹』、新約聖書でいうところの『聖霊アキウ・ブネウマの風』——すなわち【空気】。実に偉大な力だ。しかも、その一点において、なるほど、俺は果てしなく無能であり、無力である。だが、それは屈服や諦観の理由にはなりえんよ」

その言葉の力強さ、それに比べての己が弱さ。

悔しくて悔しくて、涙が出てしまう。

ヤヒヤーはそんな朱乃を冷めた目で見ていたが——おそらく朱乃の誇りを重んじ——しばらく、黙っていた。その上でため息と共に口を開いた。

「まったく、妙なことにばかり、悩む生き物だな、女とは。あの女も貴様も、呉羽もだ」

この一言には朱乃も喰らい付いた。

「……呉羽も？」

「最近はやえを改めたらしいが……まあ、些細な事だ。呉羽がどうあれ、俺たちがあんな連中に負けるわけがないだろう」

この時、朱乃は己の英語の聞き取り能力を疑った。今、ヤヒヤーは『俺』ではなく『俺たち』と言った。ヤヒヤーが仙女たる呉羽を軽んじたのも意外だったが、それ以上に複数形を用いたのが不思議だった。

これでは仙女に勝る者は、ヤヒヤーの他にもあと一人はいることになる。

あと一人……それが朱乃自身であると気付いた。

「あの連中が肌で学んだことだけを頼りにする大工なのだとすれば、君や俺は机の上でしか仕事をすることがない学者だろう。そして、あの連中は設計図なしでも。勘と経験で家を建てら

れる——設計図という辻褃合わせは後でもいい。しかし、俺たちが家を建てる時は必ず設計図を引く——それなくしては、何もできない。あの連中には俺たちがさぞや愚かに思えるかもしれない。だが、俺に言わせれば、それは視野が狭い。何故なら……」

朱乃は拳を握って言葉を繋ぐ。

「……その大工は百年経っても宇宙に家は作れない」

肌で学んだことだけを頼りにする人間は、結局、肌で学べることしか学べない。

したがって、前述の大工は一Gで一気圧の場所にしか——それも時間軸が一つで空間軸が三つという条件でしか——家を建てられない。頭の中に設計図が描けないのだ。何故なら、彼らはこの地球という環境の外に出たことがないから。無重力や真空を肌で学んでいないから、百年かかってもその外へ行くことができないのだ。

だから、大工は百年経っても宇宙ステーションは作れない。

しかし、学者は違う。学者の特性は、経験したことがない環境を、さも経験したかのように考える点にある。肌で学んでいないこと——現実には学びえないことであっても、理性と知性を以って、考えることができる。したがって、現実には（未だ）到達しえない環境でも、机の上で家の設計図を描きえる。時間軸が二本で、空間軸が二本の世界を想定することすら可能なのだ。当然、無重力や真空という条件を妄想することも容易い。

無論、それは所詮妄想なのでしばしば失敗する。しかし、その現実と妄想の差を分析し、妄想を修正し、再び試行し、修正し——それを繰り返すことで、現実と寸分変わらぬ妄想を机上に描けるようになる。

だから、学者は、宇宙に——まだ誰も経験したことのない未知の領域に——家を建てることのできたのだ。

それが知性だ。それが理性だ。全体重の二%しかない脳という一器官に全エネルギーの二割を注ぎ込んでいるヒトという生命にのみ許された確かな力なのだ。

朱乃の答えにヤヒヤーは満足したらしい。

「そうだ。未知なる状況に進出できないという点で、把握は理解に劣る。だからこそ、この世には俺たちのような頭でつかちが蔓延り、かつ、彼女たちのような仙道はこの世から去りつつある」

もしこの場に呉羽がいたら、会話の内容に頭を抱えただろう。しかし、朱乃にとっては確かな励ましになった。

「……具体的にはどうするの？」

「等価原理の法則を使う」

「はあ？」朱乃は思わず大口を開けてしまう。「等価原理って何よ。一般相対性理論なんて……」

「日本人は本当にインシュタインが好きだな」ヤヒヤーはこんな時に無駄口を叩いた。「エトヴェシユの方だ。WEPだよ」

